

# 伊能忠敬

研究

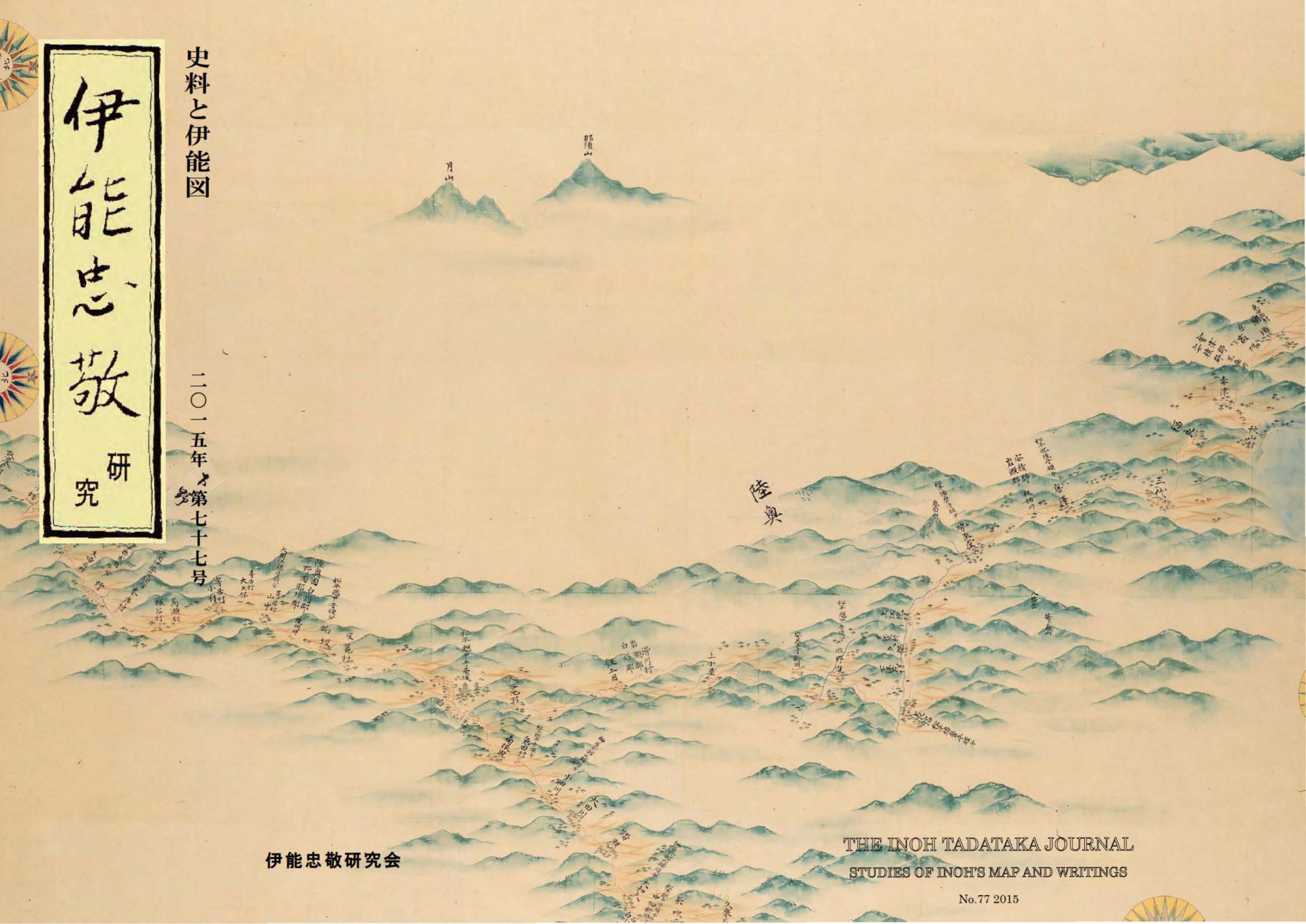
史料と伊能図

二〇一五年 第七十七号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.77 2015





# 国立国会図書館蔵伊能大図(大日本沿海輿地全図)

## 第六八図 陸奥(磐城・赤津・白川・羽前・月山)

享和二(1802)年六月十一日に江戸を発ち羽越を測った第三次伊能隊では、忠敬の身分は天文方高橋至時の弟子だったが、実績を認められて幕府勘定奉行から、御証文という指定数量の人馬を無料で使用できる旅行命令書が渡されていた。

これで幕府の公用事業であることが鮮明となり、經由町村には江戸伝馬町の伝馬役・馬込平八が発信元になって勘定奉行連署の先触れが、昼夜を問わずというから二四時間体制で伝達された。町村役人は請書に受信時刻を記載し、自分用の写しを作ると、人足を叩き起こしてすぐ次の町村に走らせた。途中の万々に備え、人足は必ず複数とし、事故があっても間違いなく到着させたという。

忠敬以下の待遇も格段に上昇し、宿は安い木銭と米代一日五合分を払えばよい所へ、手当は第二次の約三倍となっている。

江戸をたった伊能隊は六月二十日越堀宿(黒磯)を発って、下野・陸奥国境を越え、前將軍補佐役松平定信の白河領に入る。

二十一日六ツ半頃白坂宿出立。一里三十三丁歩いて四ツ頃白河城下に着く。ざっと三時半。随分早いお着きだ。ここではゆっくりリフレッシュか。後年の日程をみると、十日間に一日くらいの割合で、大きな町で逗留と出てくるが、これは多分定休日だったろう。

今回の旅では十六日目の会津若松に二泊する。これは休日だ。白河は小休止だろう。仕事もたまっていた。藩の領主便にのせて厩局へ書状を出す。これも今回から認められた連絡手段である。会津若松迄の経路を地元村役人と相談して、測量隊の泊触を出し次のような予定で測進した。

二十二日 上小屋泊、家作良し、天測。

二十三日 牧の内屋食、長沼泊、天測。

二十四日 勢至堂昼食、見代泊。板橋峠の下の唐沢には会津藩の番所があった。その先三代の村役人は帯刀して領界まで出迎えた。

村役人でも苗字帯刀を許されたものは当然両刀を帯びて武士の姿で出た。しかし、日記には袴に脇差というのがよく出てくる。町村役人も脇差を帯びるのが正装だったらしい。

二十五日 三代を出て福良昼食、赤津泊。赤津では猪苗代湖水の端に至り一覽し、又舟に乗って名所を見たところ。猪苗代湖岸は測られていないが、このときの観測により概略を描いたのであろう。地図中に赤津から湖岸への測線が見える。

二十六日は寒くて袴を着たという。この日は陽暦に直して六月二十五日で、これは異常気象だった。(渡辺)

\*表紙伊能図にはほぼ対応する範囲の現代図は18ページ下段に掲載してあります。

(表紙題字は伊野忠敬の筆跡)

## 目次 77号

### 表紙解説

国立国会図書館蔵伊能大図(大日本沿海輿地全図)  
第六八図 陸奥(磐城・赤津・白川・羽前・月山)  
渡辺 一郎

### 話題

●伊能一族と宮本茶村 宮内 敏 1

●伊能忠敬測量の『点と線』 戸村 茂昭 7

●江を走る測線はどのあたりか? 伊藤 栄子・渡辺 一郎・高宮 勲 10

●愛媛県立図書館 久門家文書 解説 前田 幸子 19

●伊能忠敬 周辺の人④ 前田 幸子 25

●江戸幕府日記を読む② 『日本東半部沿海地図』上覧 前田 幸子 25

●忠敬談話室 各地の記念碑・標柱等紹介(五) 河崎 倫代 27

●忠敬先生の没月日について 前田 幸子 31

●全ての道が通じたローマを訪ねて 戸村 茂昭 33

●小説 林蔵と秀蔵(上) 柏木 隆雄 35

●石川県支部ニュース 寺口 学 38

●加賀藩測量の足跡をたどる(四) 中塚 徹朗 42

●空撮散歩―伊能測量隊の足跡と福嶋町のできごと 中塚 徹朗 47

●各地のニュース・会員だより 中塚 徹朗 49

●総会報告・お知らせ・他 中塚 徹朗 51

◆資料「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」 伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版 監修 渡辺 一郎 編著 井上 辰男



伊能一族と

## 宮本茶村

宮内 敏

はじめに

本会会員であった窪谷悌二郎氏のご尽力により、一昨々年三月、水雲宮本先生没後百五十年祭が茨城県潮来市で盛大に行われた。



水雲宮本先生没後 150 年祭 潮来市

宮本茶村（水雲）は今なお潮来の先人として尊敬を集めているのである。

「伊能一族と宮本茶村」と題したが忠敬と茶村の間で、どれ程の関りがあつたか明確でない。

しかし、伊能家（香取市佐原）と宮本家（潮来市）は地理的に近く、文化・経済（利根川の水運など）を共有する地域の指導的立場の家柄であり、両家とも商家でもあつた。



宮本茶村翁肖像 筆者蔵

伊能忠敬の業績については、ここで述べるまでもないので省略する。

宮本茶村は忠敬とは生い立ち年代（忠敬より

四八才若年）、専門分野など異なるが共通点も多い。紙面を借りて伊能一族とのかかわりを中心に宮本茶村を紹介したい。

宮本茶村（一七九三～一八六二）

江戸時代後期の儒者、漢学者、考証学者、詩人、教育者、庄屋、郷土で常陸国潮来村（現茨城県潮来市）の年寄宮本平右衛門高重（注1）の次男として寛政五年五月十五日に生れる。

諱は元球、字は仲笏、通称尚一郎、茶村と号し晩年は水雲と改める。

幼少より聡明にして学問を好み十余歳にして兄篁村（こうそん）と江戸に出て、折衷学派の碩儒山本北山（一七五二～一八二二）の門に学んだ。

研鑽すること数年、山本北山が亡くなると故郷に帰った。親の命により仙台遊学中の兄篁村に代わって家業を継ぎ宮本家十一代当主となった。

多くの業績を残した宮本茶村は、文久二年六月二五日、郷土の潮来で七十歳の生涯を閉じた。法名は仁善義礼信士。墓は宮本家の菩提寺浄国寺に隣接する旧邸内にある。

宮本茶村顕彰碑文によれば

「・・刻苦精勤家産を再興するも富を蓄えるより名教を遺すべしと学問教育に専念、その塾名を恥不若（ちふじやく）（注2）、居所を三香社また隻硯堂と称する。学徳を慕って来り学ぶ者多く櫻任蔵竹内百太郎、伊能節軒、吉川天浦、君浦、松浦の三兄弟、鹿島則文、松岡友鹿等はその門人である。また水戸藩延方郷校に招聘され、下総の学者久保木竹窓と共に郷党子弟の教育に尽力する。庄屋となつては常に村民を慈しみ凶年に備えて義倉を設け天保の飢饉には私財を投じて窮民を救う。水戸

藩主徳川斉昭の藩政改革にあたつては数度にわたり海防教学の意見を上書する。

天保十四年篤学と

藩政村治の功により郷土に拔擢される。

然るに弘化甲辰の国難が起るや江戸に上り斉昭雪冤の運動に参加、そのために捕

われ水戸藩赤沼の獄舎に繋がる。幽囚三年、この間も自若として詩を賦し志を述べる。後に世俗を避け著述に没頭、関城繹史、諸族譜、常陸國郡郷考、常陸長歴等多くの名著を残す。知己交友また多く同門の梁川星巖、大窪詩仏、菊地五山、水戸藩の小宮山楓軒、会沢正志斎、藤田東湖、杉山復堂、立原杏所、土浦の色川三中、下総の久保木竹窓、清宮秀堅等と親しく、三河の渡辺崋山、羽前の清川八郎、長州の吉田松陰の来訪も受ける。学者、教育者、庄屋、郷土として数多の功績を遺し・・明治四十年十一月十五日正五位を追贈される。」とある。

（注1）宮本平右衛門高重…下総国高田村宮内清右衛門正壽の四子で宮本家の婿養子となる。

（注2）恥不若とは「人に及ばないことを恥ずかしく思ひなさい。恥ずかしいと思つたら一生懸命勉強しなさい。そうすれば、すばらしい未来が開けます」という意味です。潮来市を担う若い人達にこの言葉を贈ります。

（平成十五年七月、宮本茶村生誕二〇〇年祭 潮来市長 今泉 和）



宮本茶村 顕彰碑 潮来市



## 水雲橋

前川は常陸利根川からJR潮来駅付近で分流して延方の南を流れ鰐川に合流する4km程の川で、江戸時代からの重要な水上交通路であった。川の北側は古くからの集落で南側は新田開発による地域で先の震災では液状化被害が大きかった。この前川の河口にあるのが水雲橋で太鼓橋とも呼ばれる。橋名は郷土の先人宮本茶村の晩年の号から「水雲橋」と命名された。

## 源烈公（徳川斉昭）書状

後に茶村は水戸藩主徳川斉昭の藩政改革にあたって数度にわたり海防教学の意見を上書する。天保十四年篤字と藩政村治の功により郷土に抜擢される。



### 源烈公書簡

倅尚一郎事、多年好學、且門人取立合満足也、此の上郷士・郷医村役人等之倅其の外僧祝などに至ル迄取立て候様に随分心懸く可き也、但し百姓の文学出家好む事は、却つて業を失う本なれハいらぬ事也、只一筋に己か忠孝を志さず所を行ひて勤農いたすき様こそすべき者也  
三月十九日  
宮本平右衛門へ

源烈公（徳川斉昭）から尚一郎（茶村）の父高重への書簡  
潮来町教育委員会資料より抜粋

## 伊能一族

『佐原町史』によれば、「天正以前の佐原は矢作城主国分氏の領地で微々たる村落で、千葉氏衰滅の後には国分氏の臣、伊能、長澤、園城寺が移住し草分け百姓となった。・天正十八年徳川領となると代官吉田佐太郎支配となった。・」とある。

『大龍寺古文書の写』（筆者蔵）から伊能氏の系譜を調べると、その祖の大神朝臣惟基（おおみかあそん）これもと は弘仁中（八一〇年代）豊後国を領したという。その子惟季は大和高市郡西田郷に居住し天慶四年（九四二）源経基に従い藤原純友征伐に功を建て下総国大須賀荘の地頭に任命され名を景能（かげしげ）と改め伊能を姓とした。

時を経て景朝の代、義経に好意を寄せて頼朝に職を奪われ、その領地は千葉介平常胤の四男胤信（大須賀胤信）に与えられた。以来、大須賀神社の祭祀を掌るのみで家運は退勢をたどった。

後に式部という者が出て古河公方足利成氏に従って戦功を立て家名を再興した。さらに何代かを経て、朝辰（心月）と言う者、里見氏が房総を風靡する時代、敵将正木大膳（大膳の子説も）が下総を侵略すると、国分氏の遺児を庇護し矢作城（現香取市大崎）を守り、善戦するも天正十四年七月九日（一五八六）落城し自害した。時に七三歳、法号を高明院殿因州刺史心月道性大居士という。

その子は父の遺命を守り小田原城落城の後、国分氏の遺臣と共に民間に下り佐原村に移住した。それが伊能三郎右衛門家（十一代忠敬）と伊能茂左衛門家（七代魚彦、十代節軒）の祖であるという。伊能忠敬記念館付近一帯は伊能茂左衛門家跡地で、小野川を挟んで対岸の現伊能忠敬旧宅一帯は伊能三郎右衛門家跡地である。

## 国学者 楫取魚彦（小野川を挟んで忠敬の先輩）

本名を伊能景良（かげよし）といい伊能茂左衛門家の七代目の当主である。楫取魚彦（かとりなひこ）は雅号である。三七歳で賀茂真淵（注3）に入門、五年後に家督を長男に譲り夫婦で江戸に住まい、賀茂真淵の高弟として国学に専念した。国学の礎ともなる「古言梯」（ふるごことのかげはし、一般に、こげんてい）の編纂に始まり、「稽之婦手」（ならのつまで）は彼の死後、関西の学者により刊行された。二三歳年下の忠敬にとつて、先輩である魚彦の生き方が忠敬に影響を与えたであろうことは容易に推測できる。

（注3）賀茂真淵（かものまぶち・一六九七〜一七六九）遠江国敷智郡浜松庄伊場村（静岡県浜松市）の賀茂神社の神主岡部家に生まれる。享保十八年上洛し国学者荷田春満（かだのあずまろ）の門に入る。翌年江戸に移り歌文を教える。延享三年（一七四八）、五十歳の時、田安家と学御用として仕える。寛延二年（一七四九）に『萬葉解通釈』、宝暦七年（一七五七）に『冠辞考』を著す。田安家を辞して隠居した宝暦十年、『萬葉考』総論・巻一を完成する。この間、楫取魚彦・加藤千蔭・村田春海をはじめ、多くの門人を抱え国学および歌壇に大きな地位を占めた。明和五年病没。七三歳。

## 伊能茂左衛門家と宮本家の姻族関係

窪谷悌二郎氏の調べによれば前述の七代伊能茂左衛門家当主伊能（楫取）魚彦の妻は潮来宮本家の娘、阿留が嫁したが延享四年十七歳の若さで没している。また、九代伊能茂左衛門景海は婿養子で宮本家七代平右衛門徳直の次男である。それよりずっと後、十三代厚太郎氏の妻も宮本



家の娘しち（邦子）である。

当時の婚姻関係は家格の釣り合いに重きを置いたためか同一家と何代にもわたって通婚しているケースも珍しくない。同業者である場合も多く商売上の仲間であり競争相手でもあった。

### 忠敬は宮本家の娘を甥の嫁にと考えた

忠敬は実兄の神保貞詮の次男で測量隊に供侍として同行した神保庄作（伊能七郎右衛門豊秋の二男を新地に分家し庄作を養子にしようとした）の嫁にしてはどうかと妙薫（忠敬の長女稲）宛てに書状を出している。

### 書状の潮来宮本平太夫の娘とは誰か

高田清左衛門筋とは旧下総国高田村（現銚子市）の宮内清右衛門正壽のことである。正壽は老中田沼意次を介して印旛沼・手賀沼・長沼の干拓に巨資を投じたが田沼が失脚し失敗に終わった。

後、長男に清右衛門を譲り分産し清左衛門濱宅と名乗った。（隠居分家だが実権は持っていた）

宮本家は代々平右衛門か平太夫を名乗っている。九代・平太夫俊道（配は正壽の長女で高重の姉）十代・平右衛門高重（正壽の四子で配は俊道の妹）十一代・尚一郎（高重の次男で宮本茶村）

書状の娘だが高重の長女ミヨ、二女ミチ、三女ミヤ、茶村の長女たにが考えられる。

しかし、書状は妙薫宛てなので一八一〇年妙薫に改名した年以降、忠敬の没年の一八一八年までの八年間のものである。

また、書状では娘当十四歳となっているので高重の二女ミチは十一歳で亡くなっており、三女ミヤは年齢に達せず該当しない。（後に布留川家に嫁

新地中宿藤左衛門ヲ以、潮来宮本平太夫娘を嫁ニ貰ヒ申度旨、其方江一相談有之候ニ付、我等承知致し申間敷、御あいさつ被成候得共、是非二願くれ候様被相頼、無異仰遣され承知致し候、**「現宮本家柄并高田清左衛門縁組之筋、前々ハ大家ニ而不相当ニ候得共、近年ハ困窮ニ相成候よし、当時新地縁組随分」**不苦哉と存候、只庄作儀性質<sup>（ツツミ）</sup>魯<sup>（ツツミ）</sup>なる斗にて、家事執斗才覚等一切ニ無之候間、本家ニ而一、三年も奉公<sup>（ツツミ）</sup>為致、執斗方かなり相成候上にて、妻も為持可申存候、其上新地も無尽金<sup>（ツツミ）</sup>取納り不申候而は、身上向暮し方も相分り<sup>（ツツミ）</sup>申間敷候、当時ハ本家、永沢本家両家共<sup>（ツツミ）</sup>身上向キ六ヶ敷、逼塞<sup>（ツツミ）</sup>致し候時節、不取極の新地にて取急キ嫁を取候ハ、自然と物入ハかり、行可也ノ相統も<sup>（ツツミ）</sup>無覺束候、尤庄作儀性<sup>（ツツミ）</sup>静なる斗にて、才覚才知も無<sup>（ツツミ）</sup>候得ハ、急度新地相統ノ器量も不相分候、本家ニ而一、三年も働かせ、心体才覚見届ケ、其内ニ無尽ノ納り方<sup>（ツツミ）</sup>暮し方振合見届ケ、嫁ヲ取候ハ、大丈夫と存候、無尽金納り方年々暮し方も不相分、取急キ嫁を迎候上ニ而、暮し方<sup>（ツツミ）</sup>并ニ庄作亦不器量も候ハ、進退<sup>（ツツミ）</sup>難<sup>（ツツミ）</sup>と申ものなり、外聞も其身もツマラヌ事ニ相成候、当家の株敷相応ノ身上さへ、借用<sup>（ツツミ）</sup>の為ニ逼塞致し候、今三、四年も<sup>（ツツミ）</sup>見合、夫ニ而も身<sup>（ツツミ）</sup>向直り不申候ハ、佐原家内ヲ不残我等方江引取、是非ニ<sup>（ツツミ）</sup>本家ヲ大丈夫ニ相統致候様と工夫致候、其考ニ而ハ新地此度之縁組甚以不安心と存候、新地兩人ハ無異相談を差留様ニ而、<sup>（ツツミ）</sup>甚氣之導ニ候得共、身上ノ浮沈一大事之<sup>（ツツミ）</sup>事ゆへ、我等存寄無遠慮申遣し候、石之段新地御兩人、名主藤左衛門又庄作へも<sup>（ツツミ）</sup>能<sup>（ツツミ）</sup>御申談し可被成候、尤宮本ノ娘当十四<sup>（ツツミ）</sup>御座候よし、是も二、三年相延候而も宜候、夫共取急キ婚姻致し、其後身上向<sup>（ツツミ）</sup>差支、致難儀候而も不苦と被致覚悟候ハ、無是非候間先方ノ存寄宜候、下拙ハ庄作儀ニ、三年相タメシ不申候而ハ安心不致候、猶追々可申入候、以上

十二月十日

妙薫殿

伊能勘解由

伊能忠敬書状（千葉県史料近世編文化史料1-22）P33, 34

編者 千葉県史編纂審議会

発行 千葉県

ぐ）従って高重の長女ミヨと考えられる。ミヨは父高重の実家である宮内清右衛門十二世胤繁の配となっており忠敬の願った縁談は成立しなかった。

### 伊能三郎右衛門（忠敬家）家を再興した節軒

伊能茂左衛門家十代景晴は節軒と号した。常陸潮来の儒学者、贈四位宮本茶村に学び識見に富み、醤油醸造業の傍ら公共事業に盡瘁（しんすい）し藍綬褒章を下賜せられた。

『佐原町史』によれば、「津田山城守より里正、五区取締役となり苗字帯刀を許される。（里正職二八年、物頭席となる）天保の凶荒に際し毎日朝かゆを窮民に・文久年間水戸浪士騒乱には清宮秀堅らと折衝し解決した。小野川の改修にも尽力した。」とある。

### 伊能三郎右衛門家再興

節軒には二人の娘があり、長女むらには婿（現銚子市野尻町滑川勘兵衛の四男で後の茂左衛門十一代当主。筆者の高祖母やすの弟）を迎へて家を継がせた。

次女いくには海保長左衛門の三男景文を婿に迎えて忠敬の孫忠誨（ただのり）の代で絶えていた伊能三郎右衛門家を再興させた。

### 茶村と節軒のエピソード

伊能景晴（節軒）は三歳で父を失い、母に養育され縁戚となる宮本茶村門下として家業や漢学について学んでいる。その頃のエピソードを「明治四二年五月十六日於潮来町長勝寺執行行方郡教育会主催宮本茶村先生贈位祭講演筆記」に記された文学博士市村瓊次郎講演の一節から紹介したい。

「先生の一生の間は変化が多く、商業、教育、著









絹布肉筆 → (右)  
縦 51.2cm、横 51.2cm

菊池五山、宮本鉉(簗村)  
山崎雲山?、他  
下は右写真の「五山」  
部分を拡大 (筆者蔵)



一方、宮本茶村は(九歳)より五言絶句の詩を作り非凡な才能で知られていた。文化四年(一八〇七)兄簗村と共に江戸に出て山本北山(江戸の大儒学者)に入門している。(茶村の年齢十六、七歳で入門か)

文化八年(一八一二)「古塚」の詩は兄簗村の「両国竹枝」の詩と共に菊池五山(注5)の「五山堂詩話」に採録され名声を博した。補遺巻一には、大崎栄の遺稿も収められている。(注6)

その後、文化九年(一八一三)山本北山の死により帰郷、親の命により家督を継ぐ、兄は儒学を以って厩橋仙台に遊学「折衷学を以て聞ゆ」とある。(潮来町教育委員会資料、仙台人名大辞書)

大崎栄も山本北山に入門(注7)している。前述の仮定からすると、その頃の栄の年齢は二九、三五歳であり、同時期に茶村と同じ学舎にいた可能性が出てくる。

小島一仁先生によれば「栄は山本北山が死去した為、弟子の朝川善庵のもとに身をよせたのでは・・・」と述べている。(注6) そうだとすれば、

山本北山が死去するまでの数年間、茶村と一緒に学んだことは確実である。

宮本茶村と大崎栄は年齢差があるものの、両者とも出身は現在の潮来市内であり、大家であった年代、出身地、漢詩という繋がりも見えてくる。

久保木清淵と宮本茶村の年齢差は三十一歳、共に延方校に招聘され郷党子弟の教育に当たっている。両名は大窪天民や渡辺畢山らの来遊を受けている。大窪天民(一七六七生)もまた山本北山の門人である。佐原市史によれば渡辺畢山は潮来で宮本茶村家に泊まり、銚子を訪れる途中津宮に立ち寄り久保木清淵を訪ねている。

(注5) 明和六年(一七六九) 菊池室山の子として生まれる。天明七年 京都に遊学し柴野栗山の塾に入門。この年、柴野栗山にしたがい江戸に出る。文化四年(一八〇七) 五山堂詩話の刊行により菊池五山は江戸の文化人としての地位を確立した。文豪菊池寛は一族の子孫である。

(注6) 香取民衆史9「伊能忠敬の家族たち(四)ミチの死後に」小島一仁によると、栄の自叙伝に「余初め総に在りしとき窪木清淵先生に学を受け、幾許(いくだ)たくさん」ならずして都へ帰る。北山先生に謁する事を得、歳三十四、家と永訣す。寡居多年、鶯々(けいけい)孤独、頼るところない様として待むところなく紡績之余、書を読み、詩を作る・・・」とある。山本北山は文化五年(一八一五)に死去している。

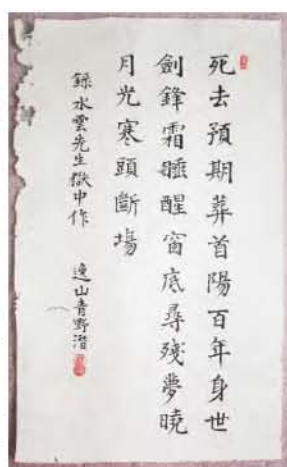
(注7) 伊能忠敬研究第33号「才女・栄」小島一仁「三十歳をすぎてから漢学者山本北山の門人となり・・・」とある。

#### 東北遊日記にみる茶村と吉田松陰

松陰は嘉永四年(一八五二)十二月十四日に江戸を発ち、尊王攘夷の地である水戸で多くの水戸藩士と語り合い東北地方をめぐる海防の現状を視察した。この時の旅日記が『東北遊日記』である。これによると宮本茶村(六十歳)は嘉永五年(一八五二)一月六日、吉田松陰(三歳)の来訪を受けている。

茶村は藩主斉昭に海防教学の意見を数度にわたって上書している。また斉昭雪免運動に参加し水戸藩赤沼の獄舎に三年幽囚された。この間の生き方が若き松陰にどう映ったであろうか。何らかの影響を与えたと言えることはできないだろうか。

茶村は次の獄中詩を披露している。



宮本茶村(水雲)獄中の詩  
青野逸山潜(明治期の書家)  
筆者蔵

死去豫(かね)て期す 首陽(しゅよう)に暮らるるを 百年の身世(しんせい) 剣鋌(けんばう)霜睡(そうすい)醒(さ)めて 窓底に残夢を尋ねれば 曉月光(きやうめい)は寒し 頭断場(どうだんじやう)

この詩は松陰により持ち帰られ松下村塾で詠われていたと云う。

翌日の七日夜には松岸(現銚子市)に着いて宿す。八日は長塚・本城・銚子港まで視察する。

利根川が海に注ぐ所、この地形が銚子の名の所以か。戸数多く繁盛しており店間甚だ江戸のよう





「松陰先生曾遊之地の碑」  
銚子市川口神社参道

である。港口、砂泥堆積し舟の通り便ならざる憾みあり（波崎側の事か）、守備も単弱と記している。

（銚子の川口は日本三大難所の一つで、

自分の身は自分で守れの意味で「銚子川口でんでんしのぎ」と言われている）

松陰は銚子港と題する漢詩を作っている。

詩は東北と常陸・江戸を結ぶ中継港として賑合う銚子港の様子を詠う一方、外国船に対し守備が弱く地の利に恃むしかないことを憂いている。

### 大崎治郎太について（才女栄の大崎家）

大崎家は江戸時代、代々大山守（大庄屋）をした旧家である。治郎太は大崎家当主大崎徳三郎の長男として慶応二年に生まれた。

十八才で家督を継ぎ当主となったが、民権運動にのめり込んだのはその後間もない頃と思われる。多感な青春時代一途に純粹に社会正義はこれだと目覚めたようである」（鹿行の文化財第25号今泉元成氏より引用）。

民衆の政府に対する実力闘争が激化すると、活動家の逮捕など弾圧が厳しく行われ、民権運動は衰退へ向った。民権運動挫折後、関戸寛蔵の長女はと結婚。義父は衆議院議員であった。大崎は潮来を本社に水戸・佐原に支社をおく新聞「東風」を発行し自ら社主となった。明治二八年六月一日創刊の一面トップを関戸の「東風の宣言」が飾った。国会開設が目前に迫ると再び新聞・講演会など活発化する。大崎（二三歳）も明治二一年土浦

で演説会を行う。その時の発言から「官吏侮辱罪」に問われる。二審有罪大陪審で差し戻し：執念ともいえる裁判闘争を繰り広げた。その後、治郎太は夫婦で渡米（明治三十年？）する。民権家で亡命し渡米した例は他にもあるが彼の場合はどうか。自由の国アメリカへの憧憬をかきたてたものは何だったか。恐らくは人種差別や偏見、市民権も与えられずアメリカ民主主義に持っていた幻想を打ち砕かれ望郷の念止み難く昭和七年故国へ帰ってきた：・村中の人が日の丸の旗をもって：とある。（鹿行の文化財第25号 今泉元成氏）

大崎勝子氏の妹、青柳敏子氏は「目的を持った帰国で・・治郎太は斉藤実首相の誘いがあり帰国する船中で、二二六事件がおき斉藤実が暗殺されたことを知った」と話された。

大崎治郎太には子供が無く、弟の次男を養子に迎えて松本家の次女（勝子・筆者の祖父の姪）が嫁し後継いだ。勝子の姉（比佐志）は潮来宮本茶村後裔宮本温氏に嫁し、温の姉（しち・邦子）は伊能茂左衛門家に嫁している。

### 宮本茶村と久保木清淵（二七六二〜一八二九）

久保木清淵は江戸時代後期の漢学者である。下総国香取郡津宮村（現香取市）に生まれ、幼名を新四郎、通称を太郎衛門、字名を蟠龍、竹窓と号した。香取根本寺の学僧松永北溟に学んだ。

大興院春岳寺照道頭居士

徳三郎義徳長男

自青年奔走自由民権運動子  
在米三十余年帰国不得志矣



潮来市清水

伊能忠敬との関係については本誌でも度々紹介されているので省略する。

宮本茶村と久保木清淵の関係だが年代差はあるものの濃密な関係であったと思うのだが、それを示す資料を見出せない。

清淵は文化五年（一八〇八）、水戸藩の小宮山昌秀（楓軒）の要請で宮本茶村とともに水戸藩延方（茨城県潮来市）の郷校で三人扶持の待遇を与えられている。とすればかなりの頻度で会っていたことになる。清淵は茶村の漢詩の才能を認めていて漢詩については茶村に依頼している。

栄は清淵に学んでいる。栄が学んだ場所はどこであったろうか。潮来か津宮か。栄は後に忠敬の内妻？助手になっている。栄を忠敬に紹介したのは清淵か。栄を山本北山に紹介したのは誰か。忠敬留守中に家を出た栄の目的はなんであったか。分からないことばかりである。

### おわりに

宮本茶村家と伊能一族との関係を整理して紹介する予定であったが結果的に羅列するだけとなった。

楫取魚彦、伊能忠敬、久保木清淵、大崎栄、宮本茶村、伊能節軒、吉田松陰・・と年代別に並べて調べていくと網目のように繋がっていく。

限られた地域の話であるにも拘わらず、当時の日本を取り巻く外圧の変化に変革を求めるエネルギーの高まりを感じるのである。

末筆になってしまったが、潮来の宮本茶村先生のことは同郷で宮本家とも伊能家とも縁戚になる郷土史研究家で本会会員の窪谷悌二郎氏が執筆されるのが最も適任と思っていた。今はそれも叶わぬことになってしまい残念である。  
ご冥福をお祈りしたい。



## 伊能忠敬測量データの『点と線』

―汀を走る測線はどのあたりか?―

戸村茂昭

はじめに

本稿は、伊能図において汀線走っているように描かれている測線が、実際のところは波打ち際からどの程度の位置関係にあるのか、松本清張の「点と線」という推理小説にヒントを得て、伊能図とその地図を完成せしめる根拠であるところの測量数値データに内在する点と線を活用して、ミクロ的な場所の特定を試みたものである。

## 一、房総における伊能測量の「点」

筆者の産土の地であり終の棲家と決めている場所は、伊能忠敬の生誕地に近い九十九里地方である。そのような縁から、以前、房総の伊能測量について、伊能忠敬測量日記と伊能図とを連携させた「第二次測量追跡記事(房総)」<sup>1)</sup>を纏めてみた。

それによると房総での止宿先は合計二十七ヶ所であったが、天測したのは十六ヶ所(伊能図上に☆印が表示されている止宿先)である。その内の十五ヶ所についての北極出地データは「大日本沿海実測録」<sup>2)</sup>によれば表1のとおりであった。

表1.房総において天測した止宿先及び沿海実測録に記載の北極出地データ

伊能図上で☆印のある止宿先	沿海実測録の記録
五井宿(本陣、甚五左衛門)	35度25分半
木更津村(名主、八左衛門)	35度23分
富津村(名主、嘉左衛門)	35度18分半
湊村(五郎右衛門)	35度13分
金谷村(名主、四郎左衛門)	35度10分半
勝山村(名主、又右衛門)	35度08分
那古村(那古観音)	35度01分半
州崎村	34度58分半
北朝井村(名主、十左衛門)	34度58分
江見村(浄照寺)	35度03分半
天津村(名主、弥平衛)	35度07分
岩和田村(名主、庄兵衛)	35度10分半
小浜村	35度14分半
中里村(名主、五左衛門)	35度25分半
屋形村(海保兵右衛門)	35度36分半
銚子・飯沼村(田中吉之丞)	35度43分

なかった。  
① 那古村(那古観音)、  
② 江見村(浄照寺)  
③ 屋形村(海保兵右衛門)  
その三ヶ所の地点の現在における日本測地系緯度<sup>3)</sup>は表2の通りである。なお、表2における④本須賀村は天測の出来なかった止宿先である。  
表2によれば、「度」の位も「分」の位も、沿海実測録の緯度と現在の日本測地系の緯度とは殆ど一致しているように見える。一方「秒」の位は伊能測量の時代では測量器具の精

表2.房総において天測ポイントが特定できる地点の現在の日本測地系緯度

ポイント	沿海実測録	日本測地系緯度	日本測地系(度分秒換算値)
①那古村(那古観音)	35度01分半	35.027644	35度01分40秒
②江見村(浄照寺)	35度03分半	35.063025	35度03分43秒
③屋形村(海保家)	35度36分半	35.620719	35度37分16秒
④本須賀		35.564547	35度33分52秒

ら三十秒までは「半」、三十一秒から六十秒までは繰り上げの「分」で表現している。この状況から考えて総括すれば、伊能測量の結果で制作された伊能図の緯度の精度は、三十秒(距離換算で一\*弱)未満を無視した地図であれば、現在の地図とほぼ一致する精度であると見なすことが出来るように思われる。

## 二、房総における伊能測量の「線」

伊能測量の「線」と言えば、伊能図の上に描かれた朱色の測線である。図1は伊能忠敬の生誕地である九十九里町にある作田川の川岸から表1における③(屋形)まで(大凡十五\*<sup>4)</sup>)の伊能アメリカ大図第八十九号の部分である。

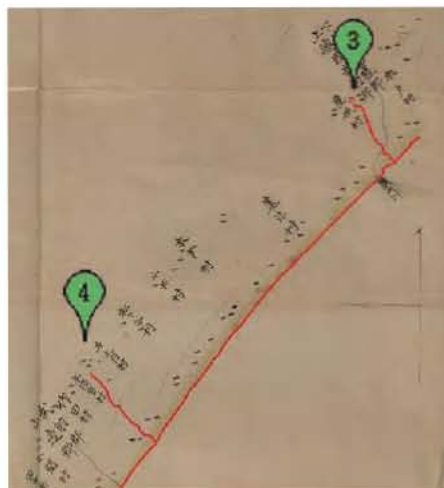


図1.九十九里～横芝光町までの測線

度が追い付かなかったようで、天測に使った器具の中象限儀の目盛りを目の子で読み取り、一秒か

この伊能図は、前章で述べた伊能測量の「点」の分析で述べた精度を考慮すれば、現在の地図の緯度とは最大「三十秒(距離換算で一\*弱)」の相違はあるかもしれない。しかしながら、図1における測線上の二地点間は僅か十\*強に過ぎない範



囲での議論に過ぎない。その範囲内で伊能測量の優れた導線法の精度で測られた結果で描かれた測線であるから、この測線そのものの端から端までの誤差は百メートル（鯨尺で大凡一町）を超えることはないように思われる。

そのような視点で図1をつらつら眺めて見て疑問に思うのは、測線が波打ち際を走っているということである。九十九里海岸の浜辺は遠浅であるから、潮の干満で汀線が数十メートルの範囲で変動する。また、図1の地域には小さいながらも河川が2本あるが、測線はその川の上も走っている。小さい川ではあるが、それでも河口は五十メートル前後の幅がある。つまり橋の無い河口を測量するのは難儀であつて本来であれば測線が途切れて居なければならぬように思われる。実際は一体どうだったのであろう？ そのような疑問が湧いた。そこで、測線そのものの全体の誤差が百メートルを超えることはないと考えられる範囲の図1上の測量線を抜出して、現在の地理院地図の上に重ね合わせて見た（図2参照）。但し、重ね合わせに当たっては、現在でもそのポイントが特定可能な止宿先であるところの表1における③屋形と④本須賀のポイントを重ね合わせた。その結果、測線は汀ではなく、汀から数百メートル離れた現在の九十九里ビーチライン（千葉県道30号飯岡一宮線）に大筋的には重なったのである。しかしながら、必ずしもピッタリと重なってはいないので、正確を期すために、国土地理院から最近提供された歴史的農業環境閲覧システム<sup>4)</sup>から入手した明治初期の地図で検討を加えることにした。

図3の右側の地図は、現在の地図上における本須賀の止宿先であり、左側の地図は対応する明治



図2. 地理院地図への伊能測線の重ね合せ

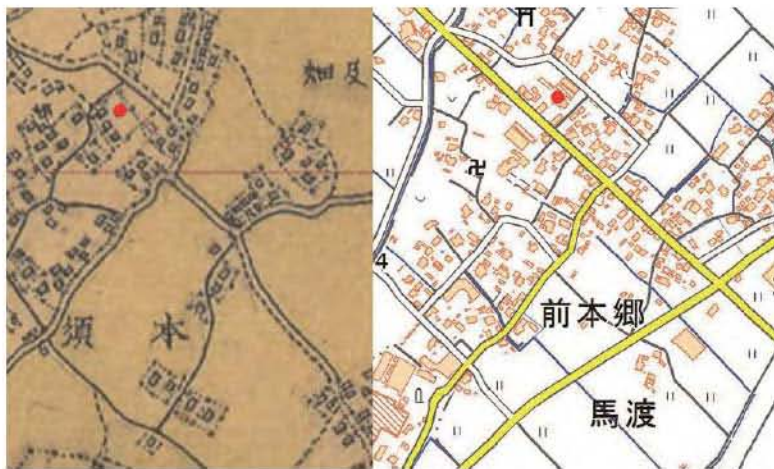


図3. 明治初期の本須賀の地図

初期における本須賀の止宿先である。つぶさに対比してみると当時の道路の名残が同じ位置関係で随所に残っているので、この明治初期の地図は評価に耐えうるように思われる。図4は、この地図の広域図の上に測線を重ね合わせたものである。

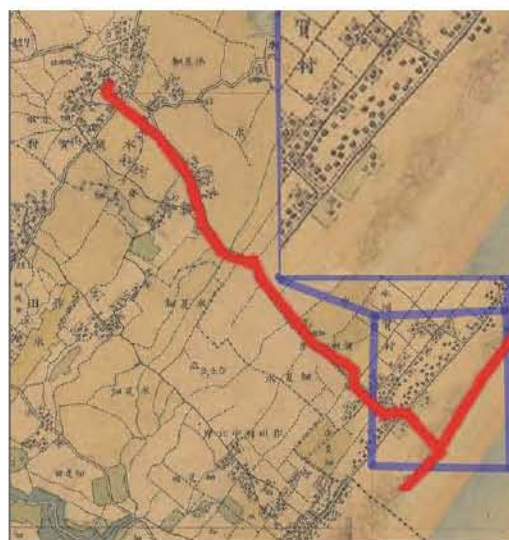


図4. 明治初期の地図への測線の重ね合せ

図4によれば、止宿先への測線は明治初期の道路の上に殆ど一致して重なっている。そして、伊能図では波打ち際であつた測線が九十九里ビーチラインと当時の汀線との中間の砂浜上を走っているように見える。その砂浜の部分を拡大して見ると（図4右上隅）、測線が走っているあたりが恰も砂丘であるかのように色濃く表現されている。

そこで更に国土地理院が提供している明治初期の低湿地帯<sup>5)</sup>を表現している地図（図5）を見ると、その部分は当時にあつて砂丘と海との境界、つまり満潮時の汀線であるように表現されているのである。





図5. 明治初期の低湿地帯

結局、九十九里海岸の伊能測量は満潮時にあつても波が押し寄せない汀線を測量していたと結論付けることが出来るようである。

念の為、明治初期の地図に対しても測線を重ね合わせたものを表現すれば図6のとおりである。



図6. 明治初期の地図を走る測線

### 三、終わりに

夏休み自由研究のテーマとして「汀を走る測線はどのあたりか？」を設定し、チャレンジする過程で、どうしてもはつきりさせなければならなかったのが、本須賀の止宿先である「五左衛門」家

の所在であった。伊能忠敬研究会の会員ではあるが研究者には程遠い浅学の徒である身の悲しさ、「五左衛門」家の現在の場所のことが既に伊能忠敬研究会報第二十六号(2001)で掲載されていたとは露知らず、筆者は本須賀地区に分け入り「この辺りで五左衛門という屋号のお宅を知りませんか？」と尋ね廻ったのであった。しかし、色よい返事は数軒まわっても返ってこず、諦めようと思つた矢先の五軒目で「あ、それなら二軒隣の行木幹夫さんですよ」という返事、勇んでそのお宅を訪問、伊能測量隊の止宿先であることを家人が認識している返事を戴いたとき、思わず「やったく！」と心の中で叫んでしまったのであった。当時の「五左衛門」家は網元兼名主として羽振りが良く、場所は現在「B」の事務所がある所で伊能図の測線の重ね合わせでも一致する場所であった。



五左衛門家の門(右上は扁額)

「五左衛門」家、正確な屋号「仲の内」は、明治時代に「A」に地所を譲り渡し、現在はそこから百五十程東の方向に離れた地点にお住まいであった。網元兼名主の風雅を好む家風のDNAを継いでおられるのであろうか、現当主がお住まいの離れの鴨居には「須静庵」という扁額が掲出されており、江戸時代における名主の屋敷の空気が漂っているようであった。忠敬先生はこんな雰囲気のお部屋に泊まったのだなと感慨にふけっていると、何やら物陰から忠敬先生が現れるように錯覚してしまつたのであった。

また、この研究を進める過程で、国土地理院が明治初期の地図を公開していることを知った。それは伊能測量時点から僅か六十年から七十年後の地図であるのだから、その地図を介在させることにより伊能測量隊の足跡研究が一段と進展するものと感ぜられたのであった(了)

- 1) 第二次測量追跡記事(房総)  
<http://www.inopedia.jp/>
- 2) 大日本沿海実測録  
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/900253>
- 3) 日本測地系緯度  
<http://www.inopedia.tokyo/gmap/lat/index.html>
- 4) 歴史的農業環境閲覧システム  
<http://www.inopedia.tokyo/gmap/lat/index.html>
- 5) 明治初期の低湿地帯  
<http://maps.gsi.go.jp/?ls=meijiswale#5/35.362222/138.731389>



愛媛県立図書館 久門家文書 解説 (一)

解説者 伊藤栄子  
記事整理 渡辺一郎  
同 高宮 勲

まえがき

本資料は四国の西条藩領の大庄屋・久門家に伝えられた伊能測量受け入れ計画の記録を翻刻したものである。久門家文書の存在は、古くから知られていたが、その全貌が紹介されることはなかった。偶々十数年前に筆者・渡辺が松山市の愛媛県立図書館で伊能測量関係の地元資料を調べていて、原文書を見つけてコピーさせていただいた。色々なイベントに係わっていて、長い間放置してしまっただが、思い出して伊藤栄子さんに翻刻をお願いした。また、高宮夫妻に、協力をお願いしてようやくまとまった史料である。

内容的には、日本各地の中でも一番多量の地元史料が残っている愛媛県域のなかでも、詳細に記述されたものと思っている。近隣の村々の対応状況を調べた上で、伊能測量への接遇要領の細部まで具体的に指示した作戦計画書である。愛媛県史で紹介されている近隣の松神子村の記録と共通点が多いが、全貌を活字化した史料はないと思われるので、紹介することとした。地元支援部隊の指揮統制にあたった村々の指導者は、このような写しを懐中にして作業指示をおこなっていたのである。(渡辺)

一・公儀天文方御役人様御通行之節、諸肝煎  
宰領勤書帳

文化五年辰八月

氷見組

安中村組頭 儀三左衛門

(安知生村を早書きの時安中村と当て字にしたか)

同村組頭 万作

石田村組頭 千五郎

中西村組頭 宇兵衛

安知生村百姓 伝右衛門

坂元村組頭 佐平次

玉之江村組頭 久米左衛門

西泉村百姓 岩蔵

石田村組頭 藤次郎

洲之内村百姓 久四郎

右之分御荷物宰領罷出申候 半左衛門

右は用意人足引纏罷出申候 柳之助

同 弥八郎

同 代作

右途中御休足御小屋肝煎罷出申候 心配仕相働申候

同 市郎兵衛

同 武吉

同 猶蔵

右道橋方肝煎二罷出申候 猶蔵

洲之内村百姓 猶蔵

右は御船肝煎二罷出申候 心配仕相働申候

同村百姓 吉郎右衛門

氷見村百姓 庄右衛門

右は途中御屋小休賄肝煎罷出申候

石田村庄屋 伊兵衛

氷見村組頭 文左衛門

同村百姓 忠兵衛

同 五郎左衛門

右は氷見村御宿手当肝煎罷出居候得共、西条へ直か二御通相成御宿相止申候而 右四人之内、

伊兵衛、忠兵衛ハ中ノ庄村御宿肝煎罷越申候

同村組頭 甚三郎

氷見村百姓 本左衛門

(両名は前後の印により変える)

右は西条御宿用意筆者手当二罷出申候 熊蔵

中西分組頭 熊蔵

西泉村下分庄屋 熊蔵

右は、かも川喜三右衛門新田御川越肝煎罷出申候

氷見組割方 郁右衛門

右は梵天組人足引纏、御領分通し二罷出申候

中ノ村組頭 新兵衛

御領分中御付添并西方聞合御用被仰付、心配相働申候

西田分庄屋 林左衛門

右は御荷物方総肝煎罷出申候 利兵衛

中ノ村庄屋 利兵衛

外山村庄屋 四郎左衛門

(注 外山村は兎野山村の当て字)

右は組切総肝煎罷出申候 四郎左衛門義ハ

前々出頭聞合御用被仰付罷越申候

利兵衛義ハ御当地(カ)相済、中ノ庄村御宿へ罷



越申候

右之通御座候 已上

文化六年巳四月

高橋茂左衛門殿

四郎左衛門  
利兵衛

## 二、人足手配大意

氷見組

人足割

伊能勘解由殿付

一、鍵持忝人 白印 看板着大小指二仕立

一、床几持忝人

一、手笠持忝人

一、火縄持忝人

一、御羽織持忝人

一、用意夫六人

拾人

日傘忝本

用意床几忝脚

茶道具、たばこ盆沓ツ

給仕人忝人

稻生秀蔵

柴山伝左衛門

附白印

一、床几持忝人

一、御絵府持忝人

一、刀持忝人

一、御磁石持忝人

一、用意夫忝人

一、縄引夫、梵天持忝拾人

式拾七人

茶道具たばこ盆沓ツ

給仕人忝人

用意床几忝脚

右式組へ用意もの

筆紙墨硯箱

菅笠四ツ

合羽

傘

木履

草履、わらんじ

丁縄沓筋

勘解由殿持参

駕老挺四人看板着

御同人

用意青駄沓挺忝人看板着

用意青駄 引戸式挺

たれ戸沓挺

毛氈

薄縁筵 幟三本竿とも

杭木

懸矢 小き青縄少々

坂部定(ママ)兵衛 下河部政五郎

青木勝次郎

一、床几持三人

一、刀持四人

一、絵図持忝人

青木勝次郎へ付参候由

一、絵府持忝人

一、御半多ん持忝人

一、同台持忝人

一、御磁石持忝人

一、用意夫忝人

一、縄引梵天持忝拾人

式三拾忝人

筆紙墨硯箱沓ツ宛

茶道具たばこ盆沓ツ 火縄

給仕人四人

合羽

用意床几四ツ

菅笠五ツ

傘

木履

草履、わらんじ

丁縄沓筋

用意青駄 引戸三挺

たれ戸式挺

薄べり筵

杭木、懸矢

小き青縄少々

幟三本竿とも

右は御二先二相成候節之手当御一同二候ハ、  
用意ものは引下り跡より参候事

但本行七拾人人足は御領分中通し、朱書諸道  
具持人足一日切り替り合

但用意歩行板ハ道方懸り人足為持参候事

御領分付通し人足は四拾人二成ル

御荷物方久保木左衛門

一、明荷葛簞式拾

一、御駕 是は勘解由殿付之所へ出シ有之筋  
沓挺

一、御長持 但此内用意葛簞へ取分ケ貴候事  
沓棹

是は大切之御品之由、別ニ才領付候筈



一、両掛挾箱

式

一、笈荷

壹ツ

一、柳こり

六ツ

一、天文御道具

式包

一、御刀箱

五ツ

一、七島包

四ツ

一、小附

七ツ

右持人、大洲辺ニ而ハ百五拾人程手当有之由  
ニ相聞候得共、是ハ道筋難所多候

由御当領ハ道筋モ宜候得ハ、百人位ニ而可然、  
御近領之趣ニ随ヒ手当可致事

外 茶道具給仕人老人

雨覆七島下敷蕤傘老本、下駄草履わらんじ  
薄縁等用意之事

一、途中御休小屋

壹番

貳番

壹組

貳組

但ニ先ニ御取分り候時、四組ニ致候ニ  
付才領一組江兩人ヅ、

一、宮之下川千汐之節手当人足之事

満汐之節ハ船渡別帳之通

一、加茂川

右同断

右同断

一、御本陣川、市塚川

右同断

右同断

右之外東筋小川尻手当之事

但 船人用之場所ハ御用意船相用ひ可  
然、船手肝煎之前宏手取り致置可申事

外ニ御見分先ニ而見通シニ障り候竹木伐り  
除夫、難所道作りとも拾人程諸道具持参候事

人足相印

勘解由殿付 白紙ニ黒丸

朱書人足白紙ニ一文字

秀藏

伝左衛門 同断白紙ニ一文字 白紙ニ黒輪違

貞兵衛

政五郎

赤紙黒丸

勝次郎

文助 同断赤紙ニ一文字

御荷物持

朱書青紙ニ一文字

御小屋掛り

貫印

道方伐除夫

白赤継分ケ

右人足一組々ニ而人足頭ヲ極メ、相印之小  
キ紙幟リを為持組ヲ相立置、才領附引纏ひ  
夫々相勤させ可申事

右御役人方曉七ツ頃御支度、六ツ時頃御出立  
之由ニ相聞候間、諸人足ハ前夜入込せ八ツ時支  
度致させ、夫々相印ニ随ひ集メ置、差図次第指  
出候様取計可申事

但本文人足能相慎無礼ケ間敷儀無之様、且見  
分所ニ而着場所之儀御尋有之候ハ、私共ハ他村  
より罷出候ニ付、当村之儀ハ不存旨申容易成ル  
義不申答様達ニ可申付置事

文化五年辰夏

公儀天文方御役人御廻浦ニて国々海辺測量有  
之節、指出候絵図之控へ但し海道無之村々ハ、  
右御役人へハ絵図不出、御当方御泊所迄出ス也

御役人御廻浦ハ八月廿七日西条御入込、同晦  
日西条御出立、東へ御通り

五、五ヶ村心得

多喜浜

同所東分

同所西分

松神子村

垣生村

一、

多喜浜

同所東分

右ハ一村之積リニ相心得、絵図面并書上帳差  
出シ御通行之節、何等御尋モ有之候節右心得ニ  
而御答可申事

一、右両浜、塩浜之儀ハ無高之儀ニ付、両浜一  
同ニいたし塩浜何軒と書出シ可申事

但新田畑高モ有之候得共、外村々よりも新田  
高ハ書出シ不申儀ニ付、新田畑高書出スニ不及  
事

付紙

本文多喜浜と相認候脇江新田所ニ  
而御座候間(カ)相認可申事

一、前段之通塩浜書出シ運上之儀御尋モ有之候  
ハ、年々出来塩運上ニ而俵ニ付 何程と相答  
可申事

但多喜浜ハ定運上東分ハ俵運上荷候得共、本  
文之通り一同俵運上之積リニ相答可申候

多喜浜

西分

右塩浜之儀ハ村高相認メ候脇江  
但本文高内ニ塩浜何軒御座候と相認メ出



可申事

右之通認メ出シ運上之儀御尋も有之候ハ、右塩浜之儀は元願出候而高付之田地を塩浜ニ仕立候義ニ而、極り之御年貢相納外ニ運上銀は相納メ不申積リニ相心得、若御尋も有之候ハ、右之趣ニ相答可申事

松神子村  
垣生村

右塩浜之儀は村高書出候次江塩浜何軒と認メ出シ、運上之儀御尋も有之候ハ、ぬい運上ニ而老ツニ付何程と有姿ニ可申答

一、寛政二戌年村役人浜師共大坂御番所江披呼登塩浜之儀委ク尋有之節、多喜浜三ヶ所を束多喜浜塩浜数三拾四軒と申達有之由、然ル所此度多喜浜西分塩浜、垣生村、松神子村とう二いたし候ニ付而は、多喜浜塩浜数相減候得共其段は不苦候 若先達而大坂表ニ而申答候とハ浜数柑減候旨之押方有之候ハ、右は塩付不宜田地ニ起し申候故、浜数相減候段可申答候  
但本文之通申答候上は塩浜田地ニ相成候場所、浜方申談究メ置可然候

一、松神子村、垣生村場ハ浜式拾軒と大坂御番所ニ而申答在之由、右ニ付両村塩浜数相増候儀尋も有之候ハ、右は前段申上候御年貢浜之儀は、寛政二戌年大坂表へ罷出候後相願塩浜ニ仕立申候儀ニ御座候と可申答

右之外塩仕成等之儀ニ付尋有之候ハ、大体先達而大坂表ニ而申答ニ随ひ猶此度申答之趣ニ都合候様御答可申事

## 六・禎瑞之儀ニ付心得

海辺之儀荷付大町組、氷見組心得

氷見組

一、禎瑞之儀は先達而申進候通り氷見村、西泉州地先ニ而両村新田畑高之内と相心得可申候

付紙ニ而

氷見村新田畑高千八百拾式石四斗七升四台  
西泉州新田畑高四百九石四升八合  
但高引わけ口左之通

禎瑞分

一、高千拾老石六斗

此畝百六拾八町六反 平高六斗  
内四百五石三斗 西泉州地先之積り  
内百八拾八石六斗七升七台 毛附

式百拾六石六斗式升三合 年引<sup>ネビレ</sup>

(引には見え難いが年貢免除分)

六百六石三斗 氷見村同断

内五百八拾老石三斗八合 毛附

式百四石九斗九升式合 年引小以

右之通相心得此度御廻浦御役人より尋有之候ハ、左之通御答可申事

一、禎瑞江御人込之節、此所何村ニ而高何程と御尋有之候ハ、いづれより何方迄氷見村分、何れより何れ迄西泉分と両村新田畑之総高を申、右之内ニ而御座候段可申答

一、見江懸り分高何程と前段ニ随ひ当時毛附高何程と可申答候

二、若高不相応地広杯と御押方も有之候ハ、毛附高ハ右申上候通りニ御座候得共、年引高何程御座候段前段ニ随ひ御答可申候

一、若地名御尋有之候ハ、右申上候通り両村地先ニ而急度地名と申ニは無御座候得共、此所ハ禎瑞と申来り候と御答可申候

一、万一海辺付村々枝郷等御調ニ付、前方指出候帳面之内氷見村、西泉州之部ニ禎瑞と申小名無之杯と御押方有之候ハ、此所之儀は前々は水沾<sup>カ</sup>強ク楽々毛附も無御座候處、役人中段々世話有之候而より追々毛附も御座候ニ付、百姓共も近年迫々出作仕候場所ニ而御座候ニ付、枝郷ニは相立不申儀ニ御座候との趣御答可申事

一、沖手御廻り被成若此所は近來筑立候新田ニ候哉<sup>ママ</sup>と御答も有之候ハ、近來ニ筑立候場所ニ而は無御座候 此所は両辺川手ニ而大雨之節大水出、沖手之義も汐深之場所ニ而波当強ク、毎々疼出来仕候ニ付、二十ヶ年已来石等も吟味在之、追々晋請有之當時ニ而はあまり疼も無御座、上手百姓共も安心仕候と御答可申候

(活<sup>カ</sup>うるおい)

一、御蔵之儀御尋も有之候ハ、右は上北<sup>カ</sup>手村々蔵米船積都合之ため建候中出蔵ニ而御座候段御答可申事

一、役所之儀御尋も有之候ハ、右申上候通り上手村々蔵米中出シ船積等之取扱并西条よりハ川越ニ而大水之節、通路難出来ニ付右等之節川手沖手筋手当方等相蒙り、役人中代り合相詰居候場所ニ而御座候と御答可申候

一、南蛮樋之事御尋御尋有之候ハ、右は御覧披遊候通り南山手より之悪水強ク、其上両辺川



手二而大水之節溢水等二而沾ひ強ク御座候処、前方之樋二而吐方惡敷御座候故、段々役人中世話被致水吐都合之ため、此所へ所々ニ御座候樋を取残候儀ニ御座候と御答可申候  
但同所番所も樋守小屋百姓家之積りニ相心得、御尋も御座候ハ、御答可申事

海辺之儀ニ付大町組

氷見組心得

新田分

下島山村

朔日市村

喜多川村

樋之口分

ナガラ  
流田村

右村々海辺付ニ候得共、自今内何等之節海辺付之村ニ不相立有之候間、古川分境より船屋村境迄ハ喜多浜分、永易村之海辺と相心得可申候  
委敷ハ絵図面之通り

一、右ニ付市塚ハ永易村枝郷と相心得可申事

一、右ニ付明屋敷分漁師共も喜多浜分支配之積り相心得可申事

一、

氷見村

西泉村

右海辺境之儀は禎瑞いもせ川尻之所境之積り相心得可申事

一、

氷見村

右沖手川手之境は禎瑞大石樋居り有之候堤角迄川手夫より海辺と相心得可申事

一、

氷見村

惠美須大黒新田之辺ハ川手堤と相心得可申事

一、

玉之江村

右村方沖手堤も川手堤と相心得可申事

但本文之通川手堤之積りニハ候得共、海辺御通行ニ付而は道筋之儀ニ付、絵図書上帳ハ指出可申事

一、

西泉村

右海辺川手之境は禎瑞御藏所之下モ塙有之候堤角迄川手夫より沖手と相心得可申事

一、

古川分

右海辺川境之儀、鰻突新田石樋北手喜多川村江通り候道筋之辺堤迄目手、夫より海辺と相心得可申事 (うなぎは活字がないので鰻とした)

但加茂川尻禎瑞御藏下も之辺迄川敷之分ハ古川分之積り相心得可申事

## 七、川々手当

兎野山村

四郎右衛門

中野村

利兵衛

川々手当

一、宮之下川榜示通り

満汐千汐とも船渡シ 但東手上候場江用意檀階子(ダンハシゴ)を用候事 汐之模様ニ寄、西手船乗場為手当左之品々用意

仕立土俵八俵

杭八本

縄式抱

歩行板四枚

是は前日西手江用意致置可申候 左候ゞ道方懸り御通り先へ廻り取計セ候事

一、加茂川榜示通り

東西堤ハ用意檀階子を用候積り川瀬通り橋掛候義、汐指込候所ハ満汐ニ候得バ船渡シ、干

汐之節用意等之儀は追而可申通候

一、御本陣川同断

東西堤右同断 但満汐ニ候得バ船渡、千汐之用意前段同断

仕立土俵拾貳俵

杭拾貳本

縄式抱

歩行板六枚

一、市塚川右同断

東西堤右同断 但満汐千汐共船渡之積りニ付、川中寄砂御通り前日堀割置可申事

歩行板四枚

前日場所へ出置可申候

一、磯浦佛崎

是ハ仕成書ニ申通候歩行板、階子積廻候筋ニ而外ニ用意不及

一、新居浜西川榜示通り

東西とも用意檀階子用候ニ及間敷候 但満汐ニ候得バ船渡シ、千汐之節用意左之品々前日同所へ揃置候様、左候ハ、道方掛り当日御先へ廻り取計セ候事

仕立土俵貳拾四俵

杭貳拾四本

縄五抱

歩行板拾貳枚

是より向略ス

一、御代島(ミヨシマ)へ相廻候歩行板

貳拾枚

船木組

三拾枚

氷見組

階子五丁

沢津組

右之通相廻させ御代島見分濟より、垣生山、黒島手当之筋ハ相止可申候 但船屋村、新居浜浦、磯浦之儀ハ先達而申通候通り相心得可申候

付紙 此所歩行板之義御取計披成候様仕度候



取ニ来り候哉、亦ハ当方より相廻候哉、御伺  
被成可然御取計、無御失念様仕度候

安知生村組頭 儀三左衛門  
柳こり六ツ 下島山村組頭 銀四郎

白印

八の一・御領分持送り品書拔帳

公儀天文方御役人御通行之節配役帳

文化五年辰八月

氷見組

藤田八之丞

一、御領分中附添

大町村

龜右衛門

中野村組頭

新兵衛

外二組々切割方老人ツ、

一、御領分総肝煎

宇高村庄屋

六郎次

喜多川村庄屋

直右衛門

松神子村庄屋

和忠次

大町組

一、組切総肝煎

神拝村庄屋

定五郎

明神木村庄屋

定右衛門

氷見組

一、組切総肝煎

中野村庄屋

利兵衛

兎野山村庄屋

四郎右衛門

御荷物方

一、御荷物方

新田分庄屋

万右衛門

総肝煎兩人

西田分庄屋

林左衛門

明荷式拾昇 喜多川村組頭

七藏

一、笈荷壺ツ才領三人

一、御長持壺棹

才領老人

葛籠三ツ

下島山村組頭

善右衛門

一、天文御道具式包

安知生村組頭伴

万作

才領老人

一、張籠御刀箱五ツ

石田村組頭

千五郎

才領老人

一、琉球包四ツ

小付五ツ計

才領老人

御挟箱式荷

中西村組頭

宇兵衛

一、用意人足肝煎老人

明屋敷分庄屋

良藏

一、茶方肝煎老人

大町村

孫藏

一、葭笠壺ツ

七島筵、雨具、床几

草履、わらんじ

青駄壺挺

薄縁三枚

肝煎老人

神拝村組頭伴

小左衛門

一、御茶方肝煎兩人

勘解由様附老人

大町村

喜四郎

秀藏様

伝左衛門様附老人

大町村

伝次

一、御駕壺挺

同御乗替壺挺

垂戸青駄壺丁

肝煎老人

同傘壺本

安知生村

伝右衛門

用意床几壺脚

薄縁筵七島幕串

一、合羽八ツ

葭笠四ツ

肝煎兩人

傘七本

坂元村組頭

佐平次

木履七足

玉之江村組頭

久米右衛門

用意床几式脚

用意間竿壺本

一、草履

わらんじ

肝煎老人

西泉村

岩藏

一、丁縄壺筋

垂戸青駄壺挺

引戸青駄式挺

薄べり

筵

肝煎老人

石田村組頭

藤次郎



七島

七島

罷出相肝煎候筈

一、筆墨紙

青なわ

箱桃灯

毛氈壹枚

肝煎老人

洲之内村

久四郎

一、用意人足 肝煎老人

福武村庄屋倅

勝平

一、筆墨紙

青縄

箱挑灯

毛氈壹枚

肝煎老人 下島山村庄屋倅

忠右衛門

一、宮之下川川越肝煎式人  
檜木村庄屋 市郎兵衛  
石田村組頭 藤次郎  
氷見村 (消し線引きあり)  
惣七 (同)

(消し線引きあり)

(同)

一、用意人足

洲之内村組頭

半左衛門

赤印

一、御茶方

肝煎老人

大町村

円藏

一、合羽四ツ

葭笠五ツ

傘九本

木履九足

用意床几四脚

用意間竿壹本

肝煎老人

明神木村組頭

弥三左衛門

一、同所御宿近辺

火廻り肝煎兩人

洲之内村組頭倅

長右衛門

一、加茂川尻 禎瑞茂平倅  
喜三右衛門新田 中西村組頭  
熊藏 熊藏  
御領分通書役 藤之石山庄屋  
氷見村 定次  
□□内 左左衛門  
御船分 庄藏

一、御領分通書役

氷見村

定次

□□内

左左衛門

御船分

一、たらひ

草履

わらんじ

肝煎老人

福武村組頭

紋藏

一、御小休小屋肝煎四人

樋之口分

洲之内村

同村

同村

喜兵衛

柳之助

弥八郎

代作

一、颯々丸肝煎老人 下島山村 庄左衛門  
御茶方兼帯  
但庄左衛門義差支之品御座候二付、新居浜浦  
御泊より八朔日市村庄屋忠兵衛二替り候筈  
一、奔飛丸 洲之内村 直藏  
肝煎老人御茶方兼帯

一、丁縄

青駄五挺

薄縁

筵

肝煎老人

福武村

九右衛門

一、途中御昼休

御賄肝煎式人

洲之内村

外二御宿肝煎之内氷見村五郎左衛門、忠兵衛も

一、隨勤御役人船

幅武村庄屋

長之丞



## 肝煎老人

御前宿江絵図書上帳持参候村役人

玉之江村庄屋

常右衛門

氷見村地所懸り庄屋

甚三郎

西泉村組頭

孫作

喜多浜分庄屋代

常蔵

朔日市村庄屋

忠兵衛

永易村庄屋

次郎兵衛

船屋村庄屋

藤次郎

右之通御座候

辰八月

氷見組

已上

大町組

八の二 新規出来之内御領分中持送り之品書  
抜帳

利兵衛写之

一、御朱印台白木三寶

大壺ツ

但御昼休人家ニ相成候節ハ御朱印台并熨

斗三寶ハ其所々ニ而出来之筈

一、熨斗台三寶

四ツ

一、上分浴衣

八ツ

一、同湯手拭

八ツ

一、大たらひ

四ツ

一、中たらひ

四ツ

一、提

四ツ

一、杓

四本

一、小桶

四ツ

一、おり桶

四ツ

一、座敷刀かけ

四ツ

一、湯殿刀かけ

四ツ

一、手水鉢桶

四ツ

一、杓

四本

上分

四ツ

一、麻手拭

四ツ

下分

四ツ

一、木綿手拭

二ツ

一、挑灯

四張

但し玄関并門前へ出シ候筋

右之通大町組、氷見組之内ニ而新規二三通り

出来、氷見村御宿、町御宿、新居浜御宿へ一通

り宛相渡候筈

但氷見村御宿相済候ハ、垣生村御宿江相廻

し可申候 町御宿相済候ハ、大島浦御宿へ相

廻し可申候 新居浜御宿相済候ハ、蕪崎村御

宿へ相廻し可申候 垣生村御宿相済候ハ、中ノ

庄村御宿へ相廻し可申候

一、御鍵かけ

御宿ニ而有合不見苦候得バ相用候事 若無之

候か見苦敷候得バ御宿々ニ而出来之筈

一、御宿印

壺ツ

但し長五間より六間之杉竿氷見村ニて出来

右は御宿印氷見御宿へ相渡し候 夫より御宿々

持送り之筈

一、高縄挑灯

二張

一、竹之子笠

十壺

一、備後表薄縁

式拾枚

同二十枚途中用意ニ持送り、夜分御測

量之節相用候筈

一、七島表同

三十枚二成ル

一、昇棒

五十

一、細引

五拾筋

一、傘

拾六本

内 紀州白張

廣島傘

九本

一、木履

七本

内 九足 白木引下駄 波緒(並カ)

七足 同断

拾六足

一、土びん

すげ緒

一、ひちりん(七輪カ)

九ツ

大和風呂

三ツ

一、汲茶碗

六十九

内 上 十式

中 十七

下 四十

一、茶だい

十式

内 上五ツ

下七ツ

一、茶碗蓋

十式

一、茶こし

四ツ

一、水こし

四ツ

一、提 但蓋付

四ツ

一、荷内 但蓋付

式荷

一、杓

六本

一、竹小杓

四本

一、たば粉盆

十三

一、きせる

十式本

一、箱挑灯

八張

一、杭

三拾本



一、掛矢	式丁	一、荷籠	七荷
一、ぼんてん	三十四本	一、荷ひかご	茶道具入
一、さいはり竹	六本	さすとも	七荷
一、段階子四挺二成ル	棒九本共		
一、御休小屋刀かけ	七ツ		
一、御休所仮用所	拾軒	御船用意	
一、同所手水提	十		
内式ツ蓋付			
杓、手拭とも、手ぬぐひ立共	四十枚	一、刀かけ	六ツ
一、筵	四十枚	一、たばこ盆	六ツ
一、日傘	七本	但老艘へ三ツツ、	
一、茶袋	四ツ	一、どびん	四ツ
一、炭人籠	七ツ	一、ごとき	四ツ
外二式ツハ炭俵入候筈		一、汲茶碗	十六
一、火ばし	三ぜん	内八ツ	上
一、火吹竹	三本	八ツ	下
一、ふきん	七ツ	一、茶台	六ツ
一、葎笠	十	内上	七ツ
御休小屋		下	四ツ
一、御朱印台大三宝	七ツ	一、茶碗蓋	八ツ
内老ツハ損じ替り	式ツ	一、茶水提	七ツ
右油紙包外二三宝下敷板添		但蓋付	
一、葛籠	三ツ	一、杓	式本
一、途中御休小屋	八組	但蓋付	
一、たらひ	五ツ	一、手拭	式本
内老ツ足付くミわ		内麻	七ツ
式ツ足無くミわ		木綿	七ツ
式ツ同ねぢわ(カ)		一、手たらひ	二ツ
一、提	二ツ		
一、硯箱	二ツ		
すミ筆とも			

次号に続く

(褐色は注記と参考)

参考 表紙掲載の伊能図にほぼ対応する範囲の現代図 (国土地理院電子国土に加筆)





## 伊能忠敬 周辺の人④

## 平山藤右衛門季忠 前田幸子

はじめに



平山藤右衛門季忠は忠敬が伊能家に婿入りする際に仮親となった人物である。婿捜しをしていた伊能家に忠敬を推薦し、神保家と伊能家との橋渡しの役をつとめた人物として記憶されている。

先日、『江戸知識人と地図』という本を読んでいると、思いがけなくこの平山藤右衛門が登場した。この本は江戸時代の知識人たちが地図をはじめとするさまざまな物品の蒐集、貸借、交換を通して、博物学的なネットワークを形成していたという文化的事象について論じている。そのネットワークで交流する知識人の一例としてこの藤右衛門が「伊能忠敬の養父として地図学史にもわずかに顔を出す人物」との解説つきで紹介され、田村藍水や平賀源内が主催する物産会に物品を出品し、同好の士と交流している姿が描き出されている。これを機会に調べてみると、季忠は単に忠敬を見出して婿に推薦しただけではなく、忠敬の人生に強力な力を与えた恩人というべき人物であることが分かった。すなわち季忠は忠敬を自らの養子にして林大学頭に入門させ、忠敬に名門平山氏の肩書と、最高学府の学歴を身につけさせた。忠敬の人生において、このことは非常に有利に働いた。季忠没後も平山家は季忠の孫にあたる平山郡蔵・宗平兄弟を測量隊員として随行させるなど、忠敬の事業を支援し続けた。今回は平山藤右衛門季忠の人物像に光をあて、忠敬の人生において平山家が果たした役割の重要性を見直してみたい。

## 『東海済勝記』の記述

『江戸知識人と地図』の中で藤右衛門が紹介されているのは三浦迂斎という博物家の著書『東海済勝記』という紀行文の中である。三浦迂斎は播州高砂の大庄屋で製塩業や廻船業を営む商人であり、『東海済勝記』は迂斎が宝暦十二年四月から八月に東海、奥羽、北陸を旅した際の紀行文である。迂斎は江戸で平山藤右衛門のほか平賀源内、田村藍水、中川淳庵、山田宗俊らに会い、姫路侯、高田侯、館林侯、出石侯ら諸侯の邸にも伺候している。その迂斎の『東海済勝記』にみえる平山藤右衛門季忠に関する記述は以下のとおりである。

宝暦十二年閏四月十三日(抄)

この夜下総の國中村といふ所にすめる、平山藤右衛門といふ人、予が旅宿えたづねて来らる。此人も此度の会に出会せる人にて、きのふ田村先生の許にて参会しぬ。此人ハ平山武者所、季重の嫡孫にて、世々將軍家へも拝謁する人也。終夜ものがたりす。昔時將軍頼家公御誕生の時、季重墓目の役つかうまつりしかば、装束の事につき、三浦義盛へ相談ありし事、家記に侍り。然れば某とも世々通家なりとの物がたり也。下総国の産物、海鏡、石髓などめぐる。即此度の会に出されし、奇物也。

(以下、海鏡、石髓の説明) 此平山氏逗留中、たび／＼来とぶらへれつ。和歌などめぐる。

(以下、長文の詞書、それに続いて和歌)

おもひきや吾妻のはてに住まる身の遠き雲井の玉をみるとハ

かく申されぬれど、その夜もいたくふけ、事にまぎれて、返しさへせざりし。

【大意】この夜、下総の国の中村という所に住んでいる平山藤右衛門という人が私の旅宿を訪ねて来た。この人もこのたびの物産会に出品した人で、昨日田村(藍水)先生のところでお会いした。この人は平山武者所・季重の嫡孫で、代々將軍家へも拝謁する人である。一晚中語り合った。「昔、鎌倉將軍頼家公の御誕生の時に、平山季重が墓目の役(産所で魔除けをする役)をお勤めした際、装束について三浦義盛に相談したことが家記に書いてある。であるから某とも代々の通家(先祖以来親しく交わってきた家)なのだ」とのお話であった。下総国の産物である海鏡(※貝の一種、ツキヒガイ)、石髓(※岩石中の粘土状の物質)など下された。このたびの物産会に出品された珍しい品である。この平山氏は私の江戸逗留中にたびたび訪れて和歌なども贈って下さった。(以下略)

## 名門の誇り

この『東海済勝記』の記述から、藤右衛門が田村藍水や平賀源内ら一流の博物学者と交流していたことがわかる。なかでも注目されるのは、季忠が平山家の由緒を語り、自らを「世々將軍へも拝謁する人也」と語ったと書かれていることである。藤右衛門は將軍に拝謁したのだろうか。または過去に平山家の当主が拝謁したのか。あるいは、「(世が世ならば)代々の当主が將軍家へも拝謁する(ほどの家柄の)人」だという意味なのか。いずれにしても平山家が平山季重の血を引く家であること、藤右衛門がその家柄を誇りに思っていたことをこの記述から読みとることができる。また即興に和歌を詠んで贈るなど、「吾妻のはてに住まる身」ながら、相当の教養人だったことがわかる。



## 名将・平山季重

平山藤右衛門家の祖である平山季重は源平の合戦の際に活躍した名将である。特に源義経率いる一ノ谷の奇襲攻撃で熊谷直実とともに平家軍に突入した勇猛忠節の武将として知られる。源平合戦を脚色した歌舞伎『一谷嫩軍記』には平山武者の名で登場する。平山氏は平安末期に起こった関東武士団の一つで武蔵国多摩郡平山村（東京都日野市）に居館を構え、平山姓を名乗った。季重の子孫が十五世紀の中葉に下総の中村郷に移り住み、郷内の壺岡城に居城したのが中村の平山氏の始めであるといわれる。最後の壺岡城主となった季邦は徳川家康の招きを避け中村に隠れ帰農した。これが平山藤右衛門家の祖であるという。東京都日野市のかつて平山氏の居館があった付近は現在平山城址公園となっており、平山城址公園駅の付近には「平山季重遺跡之碑」「季重公霊地碑」、宗印寺の「季重墓」「季重坐像」、季重を祀る「季重神社」があり、近年は地元で「季重まつり」も行われている。平山季重は二十一世紀の現在もなお人々に崇敬され存在感を漂わせている武将である。

## 平山季忠の略歴

平山季忠は宝永七年（一七一〇）、父秀暁の次

宗印寺の平山季重墓



季重坐像



男として誕生した。母は平山一族の理兵衛吉重の女であった。季忠は「性敏直、学を好み、少時江戸に遊び、聖堂に入り林大学頭に就き」学問を修めたとされる。少年時代、江戸に学んで、幕府の儒官・林鳳谷の薫陶を受け、詩文・和歌に長じ含璧と号した。藤右衛門家は学問を重視し、季忠の家督を継いだ季孝も父同様に林鳳谷に師事したという。延享元年（一七四四）三月、父の秀暁が五六歳で死去したため、当時三六歳であった季忠が家督を相続、以来、郷土・被官として多古藩松平家に仕えるとともに、一方では南中村の名主をつとめた。多忙な名主役のつとめのかたわら、和歌や本草学、博物学にも親しみ、たんなる地方の一教養人の範囲におさまることなく、たびたび出府して同好の士との交流を楽しんでいたようである。田村藍水をはじめとする本草学者や知識人との交流があったことは前述のとおりである。忠敬の仮親となり、伊能家に婿入りさせたのは宝暦十二年、五二歳のときのことである。安永四年（一七七五）二月に六五歳で死去した。このとき忠敬三十歳。季忠は忠敬より三五歳年長であった。

なお、忠敬が修業時代に平山元徳という人について漢学を学んだという口碑が伝わっている。平山家に伝わっていた文書が火災で焼失したため確認できないが、この元徳という人物が季忠だったのではないかという説もある。季忠の履歴からみて、郷党や親戚の子弟の教育に関わらなかったということは考えにくい。忠敬も何らかの形でこの人物の教えをうけたのではないかと考えられる。

## 日蓮宗と平山家

平山家、神保家、伊能家の三家はいずれも旧家

で、代々お互いに嫁を取り合う関係であった。そのため、この三家の家系図を描くときかなり入り組んだ関係となっている。主などところだけ書き出してみると、平山季忠の妹のタミは伊能家九代目当主長由の妻で伊能ミチの母親、すなわち忠敬にとっては姑、また忠敬の姉フサは季忠のいとこ泰光の妻、季忠の長子季孝の妻は忠敬のいとこ（伯父神保宗朗の娘の佐緒）、という関係であった。このような縁故から、伊能家の後見人であった伊能豊秋は、はじめ平山季忠の三人の息子のうちから婿を一人出してもらうことを希望した。しかし宗教上の理由から、それは叶わなかったといわれる。

南中村近辺は日蓮宗の檀林（僧侶の学校）をもつ古刹・日本寺を中心に日蓮宗が盛んな土地柄であった。平山家も日蓮宗の熱心な信者であったと伝えられ、その家で育ったタミは伊能家に嫁いでも真言宗に改宗せず、かえって伊能家の女性たちに日蓮宗を熱心に広めようとしたため伊能家の怒りを買ひ、長由の死を機会に、幼いミチとともに実家に帰されたといわれる。季忠が夫に死なれた妹タミと、まだ幼い一人娘ミチを家に引き取り、十数年間この母子を預かったことは知られているが、その事情はこのような宗教上の理由であった。伊能豊秋は季忠に平山家の中から婿を迎えたいと交渉したが、婿入りに際しては伊能家の宗派である真言宗への改宗を条件としたため、季忠に拒否されたのだといわれる。

## 季忠の婿選び

伊能ミチの婿選びは三郎右衛門家の後見人であった分家の伊能豊秋（一七二二—一七七二）が中心となり、宝暦八年から始まった。『伊能豊秋日記』



## 『伊能豊秋日記』より―婿選びの経過

宝暦七年（一七五七）伊能景茂（ミチの夫）死去  
 宝暦八年（一七五八）婿捜し開始  
 （伊能豊秋婿捜しに尽力するも宗教上の問題あり）

## 宝暦十二年（一七六二）

正月廿一日 三郎右衛門家、豊秋に養子の件依頼  
 廿四日 豊秋、藤右衛門へ養子の件で相談  
 廿六日 相談結果を三郎右衛門家へ報告  
 二月十八日 豊秋用務で出府（三ヶ月滞在）  
 廿二日 永沢次郎右衛門と会談  
 廿七日 伊能家から養子の件で飛脚来る  
 三月 五日 伊能家より豊秋旅宿に酒二樽届く  
 四月十三日 平山藤右衛門、三浦迂斎を訪ねる  
 十七日 豊秋、中村に平山藤右衛門を見舞う  
 四月廿六日 豊秋、出府中の平山藤右衛門と相談  
 六月十八日 平山藤右衛門佐原の伊能家に来る  
 八月 三日 藤右衛門より養子の儀、年若すぎ  
 夏 坂田郷土地改良事業 佐忠太を推薦  
 九月廿四日 神保三次郎と申仁へ取掛る積り  
 十月廿三日 中村藤右衛門、養子の儀に付見舞う  
 十一月五日 林家へ入門 平山家養子 名乗書  
 十一月廿九日 入夫決定、仲人平右衛門  
 十二月一日 藤右衛門、婚礼日程打合せに来る  
 七日 銚子より座頭見舞に来る  
 十二月八日 婚礼、中村藤右衛門方養子之積  
 九日 婚礼の振舞い 観福寺墓参 親戚挨拶

## 平山家の仮養子

伊能、神保、平山の三家はお互いに嫁を取り合ういづれも地元で有力な家であったが、神保家と伊能家との間には多少の格差があったため、忠敬

は伊能家への入夫に際し一旦平山家の養子になったといわれる。忠敬が文化五年に幕府に提出した親類書にその三家の格差が表われていると思うので次に掲げる。親類書では、養方の伊能家、平山家とも姓が記してあるが、実方は祖母の古河氏を除いて姓が記されていない。正式に姓を名乗ることをゆるされていなかったためと思われる。

## 【親類書】文化五年一月十九日提出『江戸日記』

養方	
一、祖父 下総国香取郡佐原村百姓	伊能勘解由死
一、祖母 同断	権之丞死 娘死
一、父 同断	伊能三郎右衛門死
一、母 同国同郡中村百姓	平山藤右衛門死妹死
一、倅 同国同郡佐原村百姓	伊能三郎右衛門
一、孫 三郎右衛門実子総領	伊能三次郎
実方	
一、祖父 上総国武射郡小堤村百姓	利右衛門死
一、祖母 同国山辺郡片貝村百姓	古河帯刀死娘死
一、父 同国武射郡小堤村百姓	利左衛門死
一、母 同国山辺郡小堤村百姓	五郎左衛門娘死
一、甥 同国武射郡小堤村百姓	利左衛門
右之外 親類無御座候	以上
文化四卯十二月	伊能勘解由 花押

## 林大学頭への入門

季忠は若い時から林大学頭の門人であった。学問好きでもあったが、学歴の重要性も認識してい

によれば、豊秋の奔走にも関わらず、思うように婿選びが進まなかったが、宝暦十二年の後半になつて事態が急展開、神保家の忠敬（当時は三治郎）が婿入りすることになった。下記に年表風にまとめてみたが、経過が急展開した様子がわかる。宝暦八年から四年間は進捗がないが、宝暦十二年に入り平山藤右衛門季忠が婿捜しに加わると急に活発化し、九月からの三ヶ月で婚礼までほとんど拍子に進んだ。この宝暦十二年は季忠が江戸の物産会で三浦迂斎を訪ねた年である。八月には別の候補者を年が若すぎるという理由で断っているから、忠敬はこの時期までは婿選びの射程に入っていない。ところが夏に、坂田郷の土地改良工事があり忠敬を手伝わせたところ、人使いの才能があることを見だされて一気に有力候補になった。手伝いを頼んだのだから季忠は忠敬を知つてはずである。しかし、忠敬が落ち着きのない性格なので名門伊能家の婿候補には入っていないのだらう。このあと九月廿四日には「神保三次郎と申仁へ取掛る積り」となり、一族の中でも重鎮であった季忠の推挙は力を持っていたためか、ほとんど拍子に事がすすんでその年の内に婚礼となった。忠敬当人としては、わずか三ヶ月の間に平山家の養子となり、林大学頭へ入門し、伊能家の養子として年上の子持ちの未亡人との婚礼、と矢継ぎ早に人生が展開したわけである。忠敬青年の心情はどのようなものであったらうか。これらが本人の意思とは無関係に進められたであらうことは、後年、娘の妙薫に宛てた書簡で「我等幼年より高名出世を好み候得共、親の命にて佐原え養子となり候間、好る所の学文も止め」と、やや恨みがましい語調で述べていることから推察される。



たのだろう。入夫に際し、格をつけるため忠敬を  
自らの第四子として林大学頭鳳谷に入門させた。  
林大学頭の塾入門者の控え『升堂記』によれば、

「宝暦十二年壬午 十一月五日入門  
父平山藤右衛門口入  
平山左忠次  
改伊能三郎右衛門」

とあり、伊能家の『旌門金鏡類録』には、

「同十二年午年十一月 貞恒ノ男某 平山季忠  
平山季忠ノ嫡子  
也藤右衛門  
一介メ 御先代鳳谷公へ入門シ 実名忠  
敬ト賜ハル」

と記載されているという。

# 【林大学頭詩】（世田谷伊能家蔵）

詩章 大学頭

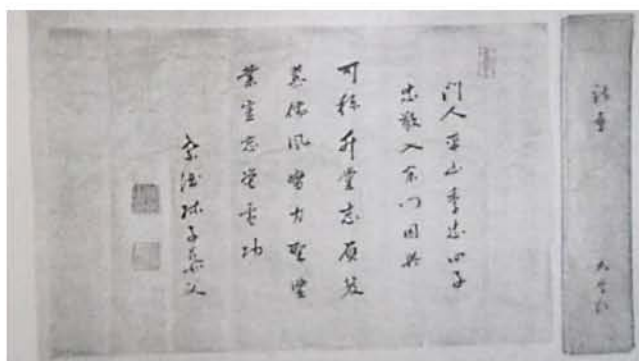
門人平山季忠四子  
忠敬入余門因與

可稱升堂志負笈

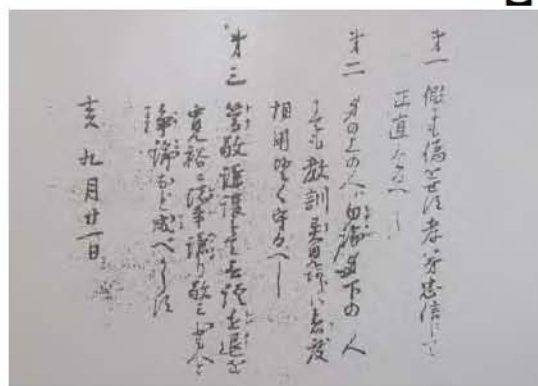
慕儒風努力聖賢

業豈忘螢雪功

祭酒 林子恭父



## 【伊能家訓】



## 【伊能忠敬名乗】（伊能忠敬記念館蔵）

名乗 從五位下守大学頭  
伊能三郎右衛門殿

忠敬 歸納 訂

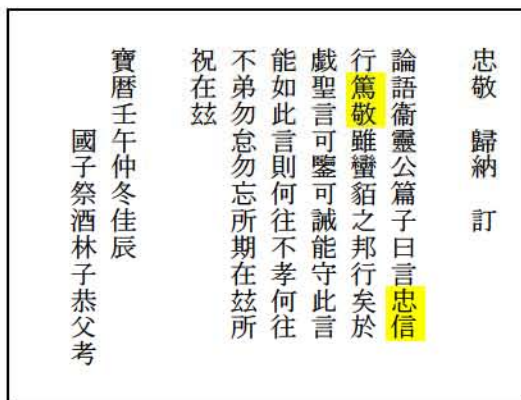
論語衛靈公篇子曰言忠信

行篤敬雖蠻貊之邦行矣於

戲聖言可鑒可誠能守此言

能如此言則何往不孝何往

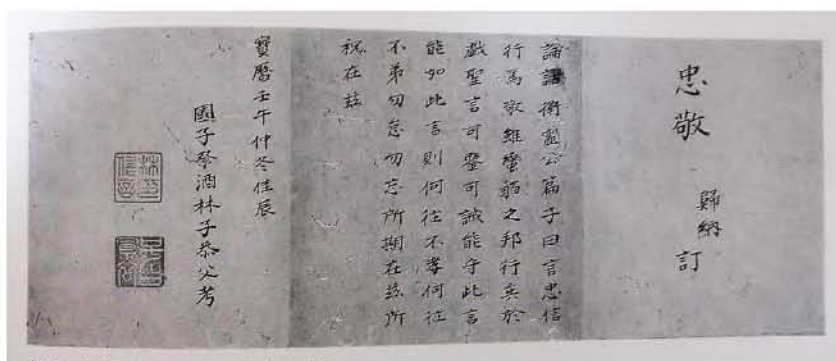
不弟勿怠勿忘所期在茲所  
祝在茲  
寶曆壬午仲冬佳辰  
國子祭酒林子恭父考



第一假にも偽をせず孝弟忠信ニして正直たるへし  
第二身の上の人ハ勿論身下の人ににても教訓異見  
（※意見）あらハ急度相用堅く守るべし  
第三篤敬、謙讓もて言語進退を寛裕ニ、諸事謙り  
敬ミ少も人と爭論など成べからず

亥 九月廿一日

（世田谷伊能家蔵）



林大学頭は季忠の名前の忠の字にちなみ、忠が含まれた章句を選んで「忠敬」と命名したと考えられる。忠敬はこの名前を署名するたびに、誇らしい思いをしたのではないだろうか。

大谷亮吉『伊能忠敬』には、このとき林大学頭から与えられた詩文と名乗書は「当時ももっとも尊重せられたるもの」と記されている。



林大学頭の門人になったことは、当時として最高学府の学歴を身につけたことでもあった。忠敬が蝦夷測量に際しての幕府高官との応対も気後れせずにできたのもこの学歴あつてのことではなかったか。忠敬の入門の費用も季忠が出したと思われるが、これら婿入りに要した費用は平山家の大きな負担となったと語り継がれているという。

ちなみに江戸日記には孫の忠誨が林大学頭に入門した際の費用として内金三百疋と入門金二朱を支出したと記録されている。ある資料によれば、広瀬淡窓（一七八二〜一八五六）の咸宜園は入学

### 参考 論語

【原文】子張問行、子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉、立則見其參於前也、大然後行也、子張書諸紳

【訳文】子張が「思いどおり」行われるにはおたずねした。先生はいわれた、「ことばにまごころがあり、行いがねんごろであれば、野蛮な外国でさえ行われる。ことばにまごころがなく、行いもねんごろでないなら〔国内の〕町や村の中でさえ行われようか。立っているときにはそのこと〔まごころとねんごろ〕が前にやってくるように見え、車に乗っているときにはそのことが車の前の横木によりかかっているように見える、まあそのようになつてはじめて行われるのだ。」子張はそのことばを「忘れないように」広帯のはしに書きつけた。

（岩波文庫『論語』衛霊公第十五 金谷治訳注）

金が百疋、年二回の授業料が各百疋だったというから、これに比べると林家の学費は高額である。

なお『香取郡誌』には出府する季忠に随伴して忠敬も林家を訪れたと記されている。たとえ形だけにはせよ入門するからには、やはり林家の門をくぐり林鳳谷から直々に名乗書を受け取っただろう。『江戸日記』には隠居後も年始、寒中見舞を欠かさず、晝一雙を贈るなど、林家への礼儀を欠かさなかった忠敬の姿が見える。忠敬は入門させてくれた季忠の配慮に生涯感謝したことと思われる。

### 名乗書と家訓

季忠が世話をして実現した林大学頭への入門ではあつたが、実際には家業に忙殺され、実際に勉学に通うことができなかった。しかし、この入門と実名をいただいたことが、このあとの忠敬の人生に影響を及ぼしたと思われる。その一例として、林大学頭にいただいた名乗書の字句が伊能家家訓

### 参考 伊能忠敬家訓

【口語文】

一、決して嘘をついたりだましたりせず、親には孝行、兄には従順、忠義、誠実にして正直であること。

一、目上の人は勿論、目下の人でも教訓となる意見があれば必ず取り入れて役立てること。

一、篤く敬う気持ちと謙譲の心をもって、言葉や立ち居振る舞いを広やかにゆったりさせ、諸事へりくだり慎み、決して人と論争などしないこと。

亥年（寛政三年）九月二十一日

にそのまま使われていることを挙げたい。

名乗書によれば、「忠敬」という実名は論語の衛霊公篇の「忠信」「篤敬」が典故となっているが、忠敬はこの二語をそのまま伊能家の家訓の中に取り入れているのである。このことは従来指摘されていなかったが、十七歳当時に頂いた名乗書の語句を、寛政三年（一七九一）四十七歳のときに景敬に与えたといわれる「家訓」の中にそのまま取り入れていることから、林大学頭の門人であること、またその際に賜った「忠敬」という実名が忠敬の生涯にわたる精神的支柱となっていたのではないかと推測されるのである。

### 全国測量と平山家の兄弟

平山家の忠敬への支援はこれだけではなかった。季忠の息子で家督をついだ平山季孝は、忠敬より五歳ほど年上であつたが、佐原時代の忠敬と兄弟のように交流し、ともに信頼・尊敬する間柄であつたと言われる。天明八年（一七八八）七月に季孝は四九歳の若さで他界するが、父の死後、その子の郡蔵（季恭）と宗平（将季）の兄弟は、忠敬の全国測量に随伴して大いに活躍する。『香取郡誌』には、郡蔵について「平山季恭は弱若の時、久保木清淵に師事し、研鑽数年後、忠敬に従ひ心を数理に注し、測量・針緯の術に精しく、忠敬の官命を帯び各地を巡るや、特に行に随ひ、沿岸測量の製図に従事して（中略）、大いに其事業を助成す。」とある。また宗平については「平山将季は忠敬に師事して、共に測量に従事す。其蝦夷地測量に至ては、概ね将季の力に頼れり」と記されている。平山兄弟の伊能測量における活躍は『測量日記』で実感することが出来るが、まず、第一次測量に



は弟の宗平が参加した。最初の測量行で蝦夷地まで難儀な旅だったが、宗平は若年ながらよくその任務を果たしたようである。一次、二次の測量に従事した後、銚子の信田家の養子となったため、以後は測量日記には現われていない。

伊能測量における平山兄弟の働きは大きく、そのために平山家は経済的に衰退したとされ、布留川氏から嫁いだ季恭（郡蔵）未亡人の奮闘・活躍ぶりが今日まで伝えられている。という。

### 平山郡蔵と第五次測量

平山郡蔵は父季孝亡きあと、家督を相続して平山藤右衛門を名乗った。第二次測量から忠敬に随行し、以後測量の知識と経験を重ね、抜群のリーダーシップを発揮して忠敬の片腕となって活躍した。第二次以降第五次までの全国測量に従事したが、第五次測量の際に天文方下役の市野金助と確執があり、規律に乱れが生じたとして破門されたことは周知のことである。この処分が一方的に過ぎたことは、郡蔵にあてた間重富の書簡によっても知られる。郡蔵を破門させたことについての忠敬の詫び状が、平山家に残されていたが火災で焼失したといわれる。破門から十年後、全国図の最終版を作成中、忠敬は破門中の郡蔵を呼び戻して地図制作に従事させた。人手不足で仕事がかどらないためだが、郡蔵が当時大困窮していたからでもあった。幕府に遠慮して平山を平野と名前を変えて採用したが、忠敬死去の翌年、文政二年（一八一九）十月、四二歳の若さで他界した。

### 御手洗測量図

この絵図は文化三年三月三日、忠敬率いる本隊

の御手洗付近における測量風景を、平山郡蔵が地元へ命じて描かせたものである。この絵図の下部分に「平山郡蔵から御本陣亭主柴屋政助への仰付けにより描かせ、伊能隊に差上げた」旨の書付があり、地元の費用だとわかる。郡蔵の強力な采配ぶりが感じられる。本陣の建物と庭園、美しい瀬戸内の風景、幕府事業となった伊能隊の堂々たる測量ぶりが郡蔵の絵心を刺激したのだろうか。素晴らしい絵画となっている。また人物を特定する付箋がついていて、資料的価値もあり貴重である。なお伊能隊に献呈された原図は現存しない。



『御手洗測量図』 呉市教育委員会蔵

### 菩提寺と墓所

平山家の菩提寺は多古町北中の日蓮宗の古刹・法性山浄妙寺である。平山家は浄妙寺の檀頭（檀家の代表）をつとめ、住職も出していた家である。境内には歴代住職と平山家の墓塔が並んでいる。平山家の墓所は多古町南中の日本寺に隣接する墓地の一角にある。季忠の墓は特定できない。周



浄妙寺にある平山家の墓塔群（左列）



日本寺に隣接する平山家の墓所  
左奥の大きな墓の後ろが忠敬夫妻の墓

知の通りここには忠敬夫妻の墓がある。季忠の第四子としての待遇であろうか。平山家にはイネ夫妻の墓と過去帳もあるという。イネは夫の死後、浄妙寺で剃髪し、戒名「華香院妙薫日明」を授かり「妙薫」と称した。観福寺にも墓があり、「楞嚴院牀常妙実大姉」という戒名もあるが、イネはおそらく日蓮宗の信者だったのだろう。平山家との強い絆を示す逸話ではないだろうか。（了）

### 【参考文献】

- 『江戸知識人と地図』上杉和央 京都大学学術出版会
- 『伊能忠敬』 大谷亮吉 岩波書店
- 『香取郡誌』 千葉県香取郡役所編輯発行
- 『新説・伊能忠敬』 佐久間達夫 編著 発行
- 『伊能忠敬研究』第14号 伊能陽子 伊能研究会
- 『伊能忠敬研究』第19号 小島一仁
- 『伊能忠敬研究』第47号 宮内敏
- 『伊能忠敬研究』第54号 佐久間達夫



## 江戸幕府日記を読む②

### 『日本東半部沿海地図』上覧

前田 幸子

文化元年九月六日

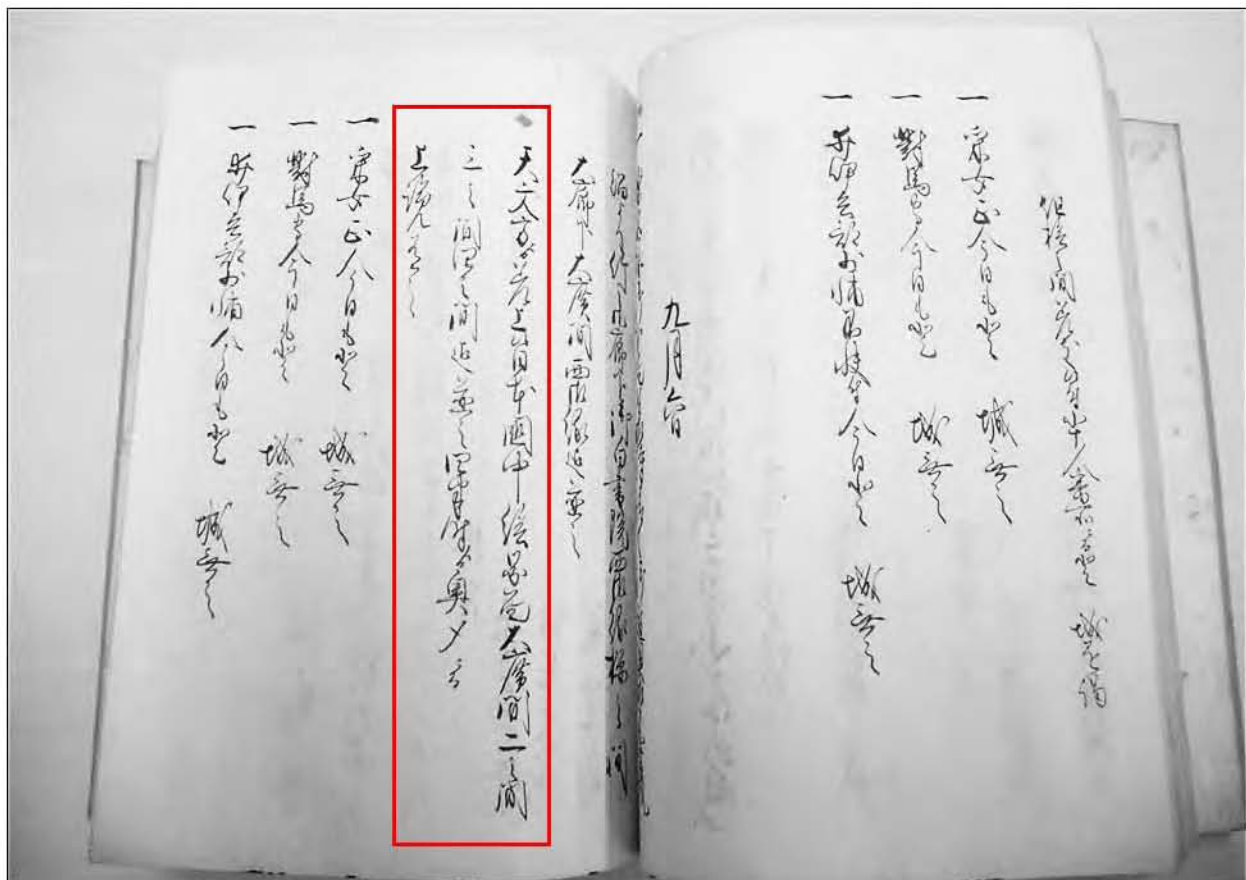
天文方より差上候日本国中絵図面大広間二之間

三之間四之間迄並之四半時より奥メ二而

上覧有之

【備考】第一次から第四次までの測量結果は『日本東半部沿海地図』大図六九枚、中図三枚、小図一枚に仕立てられ、文化元年八月に天文方から幕府に提出、九月六日に將軍家斉の上覧に供された。『江戸幕府日記』には「天文方より差し上げた日本地図を大広間に並べて四半時（※午前十一時頃）から奥メにして上覧があった」と記されている。五〇〇畳ほどもあったといわれる大広間に彩色地図が並ぶ光景は壮観だっただろう。九月十日には忠敬に幕吏登用の辞令が下りた。

なお、『続徳川実紀』には、この將軍上覧の記事の翌七日付でレザノフ来航の記事が載っており、伊能測量事業推進の背景にあった対外情勢の緊迫感が伝わってくる。





# 『続徳川実紀』——文恭院殿御実紀卷三十七——

文化元年九月

○六日天文方より呈せし日本国中絵図外殿へ臨せられて観給ふ。

【家齊覧天文方呈上日本国中絵図】

○七日此日魯西亜船一艘肥前長崎神の島に船掛りのよし。其所の奉行肥田豊後守頼常より注進ありしかば。目付遠山金四郎景晋をつかはされ。速に帰国すべしと諭告せらる。【露国使節レザノフ来航】

## 【江戸幕府日記】

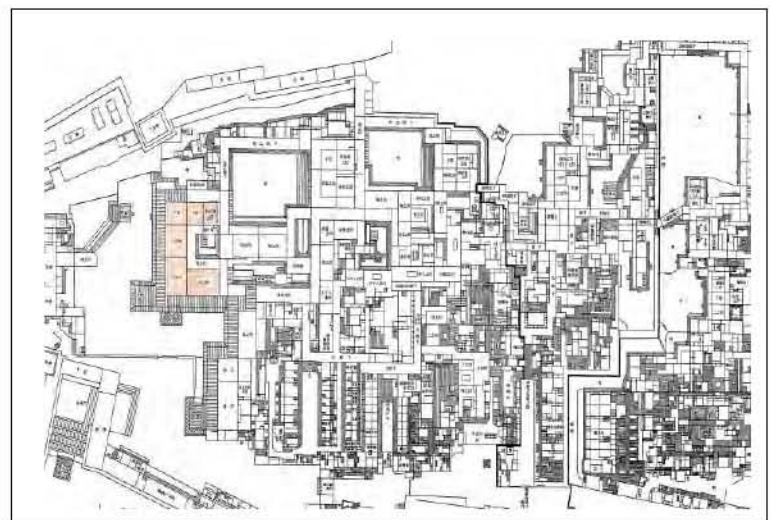
「江戸幕府の諸役所で公務の内容を記録した日記類の便宜的な総称。代表的なものは『御用部屋日記』と本丸および西ノ丸の『右筆日記』である。現在、江戸幕府日記は内閣文庫に最も多く保存されている。同文庫所蔵の幕府日記は二千数百冊にのぼるが、その中には種類・系統・年代のまちまちな各種の日記が含まれている。そのうち最も著名な一群は『柳営日次記』の内題をもつ七百七十一冊の本で、その外題は単に『年録』と題する。」吉川弘文館『国史大辞典』（抄）

※本稿の江戸幕府日記は国立公文書館・内閣文庫所蔵のものに拠った。

## 【徳川実紀】

「初代徳川家康より第十代家治までの江戸幕府將軍の事歴を中心に叙述した史書。第十一代家齊から第十五代慶喜までは『続徳川実紀』と通称されている。江戸幕府撰。」吉川弘文館『国史大辞典』（抄）

※本稿の続徳川実紀は吉川弘文館『新訂増補国史大系』『続徳川実紀』第一篇から抄出した。なお、旧字体を新字体にあらためた。



上：「江戸城本丸表・中奥・大奥図」  
（吉川弘文館『国史大辞典』）

左：大広間部分の拡大図



伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて

## ―各地の記念碑・標柱等紹介(六)―

二〇一三年秋より、全国の市町村『伊能忠敬測量日記』中の宿泊地)に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただいていた。厚くお礼を申し上げます。八月半ばから九州に入りましたが、九州内陸部の測線が複雑で、当方の頭も複雑に混乱しています。

記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱等を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、会報に随時紹介することとしました。旅行や仕事で現地にお出掛けの際は、是非とも訪ねてみてください。

### 一、広島県神石郡神石高原町

神石高原町は広島県の東部に位置し岡山県と接しています。中国山地が南に張り出した高原地形の中にあり、標高は四〇〇〜五〇〇mです。国の名勝に指定されている帝釈峡は「仙境の里」神石高原町を代表する景勝地です。

享保二年から幕末までの百五十年間、神石郡は幕府領と豊前中津藩(現大分県中津市)領に分割統治され、神石郡三七カ村中二二カ村が中津藩領でした。

嘉永五年以降幾多の変遷をへて、昭和三四年に油木町、神石町、豊松村、三和町の四町村体制となりましたが、平成十六年十一月五日、四町村が合併して神石高原町が誕生しました。

(神石高原町ホームページ等)

神石高原町の記念碑については、会員の松井義典氏が会報五四号で紹介しています。至れり尽くせりの丁寧な紹介でしたので、再度の紹介は不要かとも思いましたが、二〇〇八年から七年になります。新たな会員の方々に、この四基の記念碑群をカラー版でお届けしたくなりました。

そこで、福山市にお住いの松井義典さんに連絡を取ってみました。現在、九十五歳になられるという松井さんの、電話口でのお声は大きくしつかりしていて、そのような高齢とはとても思えませんでした。こちらの意図をお話して、以前の投稿で使われたのは恐らくカラー写真であろうから、それをお借りしたい旨を伝えました。すると、「知人と神石高原町へ行って写真を撮り直してくる。もう先が短いから、やり残しのないように、きつちりとやっておきたい」というような強いお返事でした。夏真っ盛り、ご高齢、と心配になり、神石高原町教育委員会生涯学習課にお願いしたところ、早速現地へ行って撮影してください、今号に間に合いました。ありがとうございます。

#### (1)

①名称 石碑「伊能忠敬測量之地」

②説明文

(左側面)「伊能忠敬の功績」

近代的測量法を学んだ忠敬は五五歳から七二歳までの間、足かけ十七年にわたり北海道から九州まで地球一周を越える四万四千kmを測量し、天体観測地点約千二百箇所を達した。没後後継者により業績をまとめた日本初の実測地図「大日本沿海輿地全図」

完成の基を築いた。」

(右側面)「神石の足跡【原文訳】(省略)」

(裏面)「神石の足跡図(省略 神石郡内の測量

隊の行程を矢印で示した略図)」

③設置場所 神石高原町時安5090

神石高原ホテル(旧ウインズコートホテル)

④設置年月日 平成十六年(二〇〇四)十一月五日

⑤設置者 伊能忠敬測量の地碑建設委員会

⑥設置の背景・経緯 伊能忠敬の偉大な業績を称え、永く後世に伝承して地域活性化に寄与することを目的に、町村合併事業として碑を建

立する

⑦見学の可否 随時可能



神石高原ホテルの敷地内に設置された石碑

追記：今年六月、長野県の会員市川美津夫さんから、この石碑の写真を頂戴していました。伊能ウオーク仲間の神田光昭さんがたまたま神石高原ホテルで行われた姪御さんの結婚式に参列してて発見されたそうです。「伊能ウオークに参加してなかったら見過ごしていたかも知れません。何か



の縁を感じました。」とメールに書かれていました。  
神田さん撮影の石碑側面と裏面の写真を紹介しま  
す。



(上) 左側面「神石の足跡」  
(左) 裏面「人跡の足跡図」



(2)

- ①名称 石碑「伊能忠敬測量隊宿泊邸跡」
- ②碑文「文化八年(一八一二)二月十日支隊泊  
文化八年(一八一二)二月十五日日本隊泊  
夜天体観測  
庄屋 七郎左衛門邸宿泊  
神石高原町合併記念

- 平成十六年(二〇〇四)十一月五日  
伊能忠敬測量の地碑建設委員会」
- ③設置場所 神石高原町油木乙1930三輪酒造前
  - ④設置年月日 (1)に同じ
  - ⑤設置者 (1)に同じ
  - ⑥設置の背景・経緯 (1)に同じ
  - ⑦見学の可否 随時可能



約三百年続く三輪酒造の門前に  
設置された記念碑



(三輪酒造ホームページより)

(3)

- ①名称 石碑「伊能忠敬測量支隊宿泊邸跡」
- ②碑文「文化八年(一八一二)二月十一日 泊  
庄屋 矢田貝孫兵衛 正都邸  
文政三年(一八二〇)享年五四歳没  
神石高原町合併記念  
平成十六年(二〇〇四)十一月五日  
伊能忠敬測量の地碑建設委員会」
- ③設置場所 神石高原町豊松中平
- ④設置年月日 (1)に同じ
- ⑤設置者 (1)に同じ
- ⑥設置の背景・経緯 (1)に同じ
- ⑦見学の可否 随時可能



今は笹藪となった「庄屋 矢  
田貝孫兵衛」家跡の記念碑





(4)

①名称 石碑「伊能忠敬測量本隊宿泊跡」

②碑文「文化八年(一八一二)二月十四日泊

夜天体観測

年寄 門田久治良翁邸(寄定屋敷)

文政四年(一八二二)四月忠敬一行宿泊

十年後没

神石高原町合併記念

平成十六年(二〇〇四)十一月五日

伊能忠敬測量の地碑建設委員会

③設置場所 神石高原町下井関

④設置年月日 (1)に同じ

⑤設置者 (1)に同じ

⑥設置の背景・経緯 (1)に同じ

⑦見学の可否 随時可能



旧門田家跡地に設置された記念碑

(広島県神石高原町生涯学習課提供)

二、島根県雲南市

雲南市は、島根県の東部に位置し、南部は広島県に接しています。南部の中国山地から北部の出雲平野まで標高差が大きく、市内には、ヤマタノオロチ伝説で知られる斐伊川が流れ、各地に神話や伝説、神楽などが伝承されています。また、一カ所からの出土例としては日本最多となる三九個の銅鐸が発見された加茂岩倉遺跡が知られています。

古くから斐伊川の支流周辺の低地では農耕が営まれ、山間地ではたたら製鉄や炭焼きが盛んに行われてきました。また、山陰と山陽を結ぶ主要街道上に位置することから、陰陽を結ぶ交通の要衝として栄えてきました。

平成十六年十一月一日、八つの町村が合併して雲南市が誕生し、若者や市民がいきいきと課題解決にチャレンジするまちづくりを進めています。

(雲南市ホームページ等)

①名称 石碑「伊能忠敬測量隊一行ここを罷り通る」

②碑文

(表)「日本地図完成に生涯現役をかけた男

伊能忠敬測量隊一行 ここを罷り通る」

(左側面)「平成十六年三月吉日 氏子一同」

(右側面)「歩測日 文化十年(一八一三)十一月二十四日」

月二十四日

③設置場所 雲南市木次町東日登 1345

大森神社境内

④設置年月日 平成十六年三月

⑤設置者 大森神社氏子一同

⑥設置の背景・経緯 不明



神社本殿前から木次町東日登地区と寺領地区の家並みを望む

石碑は鳥居の右の杉木立の前にある。大森神社



大森神社の参道

⑦見学の可否 随時可能



について『測量日記』には、「東日登村：字一ノ段一町斗引込左 大森大明神ノ社」と記されている。



「測量隊一行

ここを罷り通る」の石碑

（雲南市教育委員会社会教育課提供）

※木次町八日市には「浪花の大松」と呼ばれる、樹齢四五〇年、高さ十二m、幹周り周囲二・八mの大松がある。左へ九m、右へ十六mの枝を屋根の上に伸ばしている。かつてこの家が測量隊の宿所土屋半十郎家だった。明治に入って今の酒屋・浪花家の所有となり、「浪花の大松」と呼ばれるようになったらしい。伊能忠敬も見た大松である。（「浪花の大松」でネット検索してみてください。）

文化十年（一八一三）十一月二四日の『測量日記』には、木次町八日市の土屋半十郎宅に宿泊、「家作よし一軒済」とあり、部屋数が多く分宿する必要がなかったようだ。この大松の枝ぶりを見れば合点できる。

### 三、島根県仁多郡奥出雲町

奥出雲町は、島根県の東南端に位置し、中国山地の嶺をへだてて広島県と鳥取県に接する、神話に名高い斐伊川の源流域にあります。

この地は、「古事記」、「日本書紀」の八岐大蛇（ヤ

マタノオロチ）退治や、素戔鳴尊（スサノオノミコト）が降臨したと伝えられる出雲神話発祥の地です。また、古くから「たたら」製鉄で栄え、今でも世界で唯一、古来からの「たたら」操業を行い日本刀の原料となる玉鋼（タマハガネ）を生産しています。

平成十七年三月、旧仁多町と旧横田町の合併により誕生しました。（奥出雲町ホームページ等）

①名称 木柱「伊能忠敬測量地点」

②碑文

（表）「伊能忠敬測量地点」

（裏）「東経一三五度五五分 北緯三五度二分」



式内 三澤神社

（左側面）「文化十年十一月二十三日（一八一三）」



測量隊が宿泊した塗屋（長瀬氏宅）

（右側面）「三澤神社 海拔二六五米」

③設置場所 奥出雲町三沢 三澤神社の中参道左側

④設置年月日 平成十四年

⑤設置者 三澤神社

⑥設置の背景 奥出雲町に残る文書から、伊能忠敬が三澤神社まで測量したことを知り、参拝者や町の人々にも知ってほしいと思い、標柱を設置。神社には記録なし。

⑦見学の可否 随時可能

『測量日記』には、式内三澤神社の社前まで測り打ち止めたこと、祭神・祭日・神主名を記している。参道には、忠敬たちも見たであろう樹





年（一八〇三）に造られた庭園が、現在、可部屋集成館の櫻井家住宅で公開されている。伊能忠敬一行も見たはずの庭園である。

#### あとがき

今回は三市町の記念碑を紹介しました。広島県神石高原町の四基は以前からよく知られていたものですが、島根県雲南市と奥出雲町は初めて会報に登場します。原稿の締切日直前に届いたり、偶然ネット上で発見したものです。神石高原町と雲南市、奥出雲町の担当者様には現地へ出かけて撮影していただき、本当に有り難く、感謝申し上げます。木柱を建てられた三澤神社宮司陶山親敏様にもお世話になりました。ありがとうございます。

元会員の松井義典さんの気概には、大いに学ぶところがありました。会報五四号一ページの「史跡探訪」、八〇一五ページの記事を是非ご覧ください。松井さんの先祖で測量隊の供侍だった松井沢次、榎本武揚の父箱田良助、神辺の本陣に忠敬を訪ねた菅茶山のことなども記されていて、大変興味深い報告となっています。

「伊能忠敬たちが来た！」という驚き・感動が原動力となって、伊能図の測線上に無数の記念碑・案内板が建てられても不思議ではありません。でも、想像すると嬉しいような、怖いような……

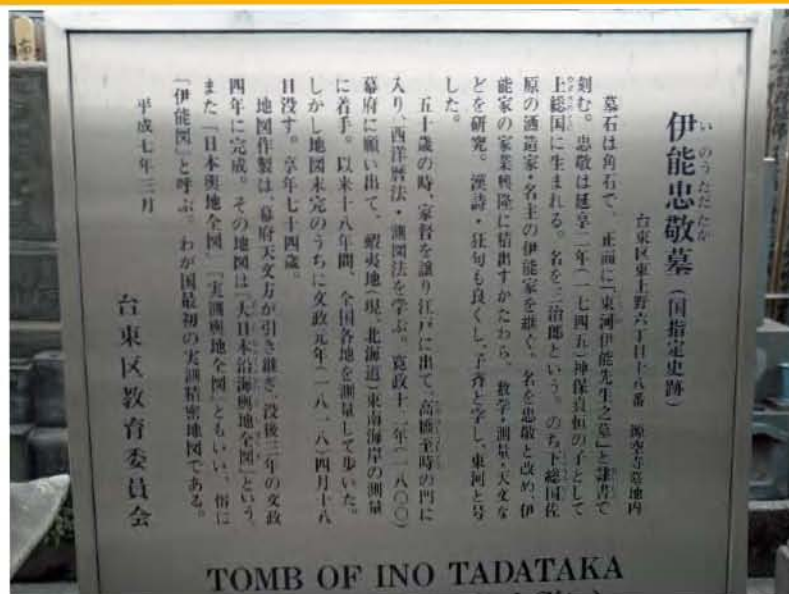
（没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代）

## 忠敬先生の没月日について

前田 幸子

昨年四月十三日のことである。この日は忠敬先生の命日なので上野の源空寺に出かけた。お墓にお参りしたあと、何気なく墓前の説明板を読むと、忠敬は「文政元年（一八一八）四月十八日没す」と書いてある。四月十八日？はて忠敬先生は四月十三日、今日が命日のはずだが……。きつねにつままれたような思いで帰宅し、手元の資料を調べてみると、大谷亮吉『伊能忠敬』をはじめ、どの資料も「四月十三日（新暦五月十七日）没」と明記してある。説明板の「四月十八日没」という日付は何に拠ったのか。設置者である台東区教育委員会に問合わせてみた。すると「源空寺の説明板は平成七年三月に設置したもので説明文の原稿はありますが、どのような資料に基づいたかは確認できません。台東区の中央図書館が所蔵している以下の人名事典を参考にしたかもしれません。」として、岩波書店『国書人名辞典』、平凡社『日本人名事典』、吉川弘文館『国史大辞典』を挙げた。そこで図書館に行つて人名事典類を調べてみると、驚いたことに全て「四月十八日没」と書かれている。これほど著名な歴史上の人物の没年月日が、なぜこんなことになっているのか。各出版社は一体どのような資料に基づいて「四月十八日没」としたのか。出版年が最も早い、『国史大辞典』の吉川弘文館に問合わせた。「伊能忠敬の項の執筆者は大矢真一先生ですが四月十八日没の根拠は不明です。お調べして





上野源空寺の「伊能忠敬墓」説明版

とを研究。漢詩・狂句も良くし、子齊と字し、東河と号した。

五十歳の時、家督を譲り江戸に出て、高橋至時の門に入り、西洋暦法・測図法を学ぶ。寛政十二年（一八〇〇）幕府に願い出て、蝦夷地（現、北海道）東南海岸の測量に着手。以来十八年間、全国各地を測量して歩いた。しかし地図未完のうちに文政元年（一八一八）四月十八日没す。享年七十四歳。

地図作製は、幕府天文方が引き継ぎ、没後三年の文政四年に完成。その地図は「大日本沿海輿地全図」という。また「日本輿地全図」「実測輿地全図」ともい、俗に「伊能図」と呼ぶ。わが国最初の実測精密地図である。

平成七年三月

後日連絡します。」後日連絡があったが、「日付の根拠はわかりませんでした。ご指摘は記録として保管して今後の参考にさせていただきます。」とのこと。この大辞典は参考文献として『伊能忠敬測量日記』と大谷亮吉『伊能忠敬』をあげている。しかし、大谷本は「四月十三日没」としているのだから、これを参考にして「四月十八日没」というのは理解できない。同様に、平凡社『日本史大事典』『執筆者・保柳睦美』は参考文献として大谷亮吉『伊能忠敬』、保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』、小島一仁『伊能忠敬』をあげているが、これらはいずれも「四月十三日没」としている。「四月十八日」は一体どこから出てきたのか。全く不思議である。

結局、「四月十三日没」と記述している事典はインターネット百科事典ウィキペディアだけであった。この百科事典は誰でも書き込める自由編集の形をとっており、情報の信憑性は保証されていない。しかし「伊能忠敬」の項を読むと、多くの参考文献を参照して書かれた労作であることがわかる。大手出版社の多数の事典類が、先行の大辞典の（おそらくは校正ミスと思われる）誤記を横引きしたかのようなドミノ倒しを演じているのとは対照的である。

今回のことではからずも人名辞典類の裏側を見てしまった。各出版社は先行大辞典の権威に頼るのではなく、自力で資料に当たり、責任をもって編集してもらいたいものだと思う。

ちなみに、忠敬先生の公式書類上の没年月日は「文政四年九月四日」、「未之中刻」（午後二時頃）、享年は「已歳七十七」であった。（了）



※忠敬先生の没年月日について伊能洋氏のご教示をいただいた。厚く感謝する次第である。

※大矢真一（一九〇七—一九九一）は、日本の数学史学者。富士短期大学教授。日本数学史学会会長を経て名誉会長。『日本科学史散歩 江戸期の科学者たち』中央公論社 1974 自然選書



## 全ての道が通じたローマを訪ねて

戸村茂昭

はじめに

世界各地からの道をローマに通じさせたローマ帝国、そして世界中のカトリック信者が巡礼に訪れる新しいエルサルムであるバチカン、そのどちらにも関係を持たない身にも拘わらず「ローマへのバカンス旅行」という「柵から牡丹餅」、いやいや季節柄「柵から御萩」が落ちてきた。今年の誕生日を以って企業年金が満期になり、今後はつましい公的年金生活者となって寂しいだろうからと娘の婿殿が親孝行の真似事と称して仕事の関係でしばしば出張して気に入っているローマを見させてくれることになったという次第である。

シニア世代になってまさに「五十の手習い」として天文暦学を学び、天命を得て日本全国を歩きとおして精巧な地図を完成させた忠敬先生には申し訳ないが、ローマがローマたり得た背景には必ず精巧な地図が存在していたに違いない。その証拠とか名残でも目にし、そのことを伊能忠敬研究に投稿できればとアリタリア航空に搭乗したのであった。

### 一、バチカンにて

成田国際空港を午後一時過ぎに離陸した飛行機は北に向かい、シベリアの上空を経てローマの中心から三十キロ南西に位置するフィウミチーノ空港（別名レオナルド・ダ・ヴィンチ空港）に直行で着陸した。現地時間で午後七時。婿殿が氣を利かせてくれて座席はプライマリー・エコノミストであったが、いやはや十三時間のフライトはシニ



図2.ローマ市庁舎(裏側)

その融合状態の顕著な代表例がカンピドリーオ広場にある市庁舎である(図2)。ここは古代ローマ時代は神殿が置かれその遺跡がそのまま最下段、その上に中世の元老院の建物、更にその上にミケランジェロ設計になる建物が建造されて現在に至っているものであった。



図1.ローマの城壁 ピンチアーナ門

アにはきつかった。止宿先はボルゲーゼ公園の南端にある城壁ピンチアーナ門(図1)から百五十メートル程旧市街に入った高級住宅街に在る五つ星、映画「甘い生活」のロケが行われた地域とか、いきなりローマ帝国の城壁を目の当たりにし、気分はすっかり二千年前にタイムスリップしてしまった。実は翌日以降ローマ市内を歩きまわって分かったことは、旧市街の殆どその領域の地下及びその地上部分とはローマ帝国の遺蹟が玉石混淆の融合状態であることを目の当たりにしたのである。

その融合状態の顕著な代表例がカンピドリーオ広場にある市庁舎である(図2)。ここは古代ローマ時代は神殿が置かれその遺跡がそのまま最下段、その上に中世の元老院の建物、更にその上にミケランジェロ設計になる建物が建造されて現在に至っているものであった。

さて、翌日は新しいエルサルムであるバチカンを訪問した。訪問した時期は夏のバカンスの時期であったので運よく長蛇の列を並ぶことなく入門できた。今を去る六十年前の高校時代に世界史で勉強しただけであり、信仰と言う程大げさではないが代々が天台宗の檀家なので、一体このバチカンが何なのか詳しく学んだことがなかった。そして、今回わかったことは、要はキリストの一番弟子であり且つキリストから天の王国の鍵を渡されて教会を指導せよと命じられた使徒ペテロのお墓であって、併せて、そのお墓の上にキリストとの約束である教会を指導する場所としての聖堂ということなのである。では、そのバチカンに何があるかと言えば、・・・残念ながら説明できる能力が無い。印象としては「奇跡の話が多い」ということ、ローマやエジプトにあったオベリスクや彫刻や石造が無数に集められていること、そして、ルネッサンスの巨匠であるラファエロ、ミケランジェロ、ダ・ヴィンチによる神々しいまでのキリスト教の宗教画でシステイーナ礼拝堂が飾られている、ということに尽きるようであった。

### 二、精巧な地図があった

バチカン博物館には様々なギャラリーがあった。例えば「大燭台のギャラリー(古代彫刻)」、「エジプト美術館」、「新回廊(古代彫刻)」、「ラファエッロの間」等、そのようなギャラリーを流汗淋漓の状態で人波みに押されながら、見た瞬間にその彫刻や宗教画や石造などの名前が忘却の彼方に消えてゆく中で伊能忠敬オタクにとっては歩みを止めたくなかったギャラリーがあった。その名は「地図のギャラリー」。イタリア各地方と教会所有の土地



の地図が数十枚展示されていた。中でも古代イタリア全景を表していると思われる地図に目が留まった(図3)。



図3. 地図のギャラリーに展示のイタリア全図

一見すると、記憶の中にある長靴の形をした現在のイタリアの地図にそっくりである。ガイドの方に聞くと、現在のイタリアの地図に殆どそっくりで正確であるとのこと。そして、この地図は十六世紀の後半に数学者兼宇宙学者兼建築家のイニャツィオ・ダンティが描いたものであるとのことであった。つぶさに見てみると、江戸時代の国絵図とは違い、最近のネットで紹介されているグーグルアースのように宇宙からの画像のような表現形式をしており、結構正確であるように感じられた。やはり、世界各地からの道をローマに通じさせたローマ帝国、そして、世界中のカトリック信者が巡礼に訪れる新しいエルサレムのバチカン

があるイタリアであるから、道造りにあたって伊能測量のように実測した結果の地図なのではなからうか?と仮説を立ててみた。そこで帰国してから国土地理院の現在の地図と対比してみた(図4)。



図4. 現在のイタリア半島を展示の地図に重ね合わせた状態

図4に示した通り、結果として南端は一致するようであるが、北部の方はローマのやや南部のあたりから西方に十五度程偏っているようであった。これは各地方の下絵をつなぎ合わせたズレではないかと思ひ付き、北部を十五度ほど時計回りに回転させて再度重ね合わせてみた(図5)。

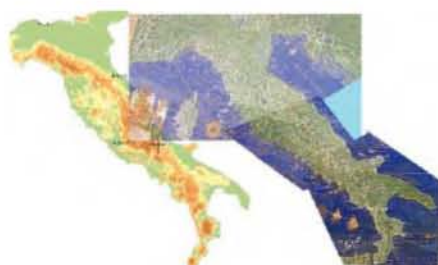


図5. 北部を時計回りに15度回転させて重ね合わせたもの

すると、ほぼ一致した。つまり、仮説は大筋成立したように思われるのである、が如何であるうか?識者のご判断を伺いたいものである。

### 三. 終わりに

ローマの旧市街は案外狭い。二日も過ぎると案内なしで地図を頼りに名所旧跡を訪ねられる感じがしたので「ローマの休日」の追体験としやれてみた。先ずは「スペイン広場」、続いて「トレヴィの泉」、更に足を延ばしてローマ発症の地と言われる「フォロ・ロマーノ」「コロッセオ」「カンピドリーオ広場」「真実の口」「チルコ・マッシモ」いずれも「ローマの休日」や「ベン・ハー」や「クレオパトラ」という映画でおなじみの場面が想いだし、二千年のタイムスリップによるバック・トゥ・ザ・フューチャーの旅をしたような錯覚に陥ったものである。





## 小説

## 林蔵と秀蔵（上）

柏木隆雄

御用提灯に警護された二丁の唐丸駕籠が奉行所の門を入った。御書物奉行天文方、高橋作左衛門景保が逮捕された。

文政十一年十月十日深夜、町中をおおぜいの補吏が駆けぬけた。奉行所内は篝火が焚かれ、葵の御紋の幕も張りめぐらされて、次つぎに御役職の駕籠も到着した。

作左衛門景保の罪状は、ご禁制の日本図をオランダ特使シーボルトに渡したことである。

奉行所の屋敷内の奥の間、林蔵が控えている部屋の襖が開いて入ってきたのは町奉行の筒井伊賀守、

「間宮どの、お待たせしたな、夜分遅くのお出ましでかたじけない。いま景保どのの一応の詮議が済み申した」

「お役目ご苦労にございます」

林蔵は膝を正して頭を下げた。

「大目付村上大和守どの、御目付本目帯刀どのにも立あつていただき申した、押収した品々はこれからの調べになる。おそらく咎めは天文方にも及ぶことになる」

とつさに林蔵の頭に、お役所の門谷清治郎、

吉川克蔵、永井甚左衛門などの顔が浮かんだ。

伊能忠敬の地図御用所に入入りしていた者どもである。景保の腹心、測量御用出役の下河辺林右衛

門は景保と同刻に捕捉され奉行所内に留置されていた。

林蔵の密告が端緒となって幕府を動かしこの夜の一夜逮捕となった。この件はどこまで展開をみせるのか。長崎の蘭学者や佐原の伊能家にも及ぶのか。林蔵は怖れを感じていた。

「ところで間宮どの、石町の長崎屋に入りましたことがござるか」

奉行のこの問いかけに林蔵の心は一瞬たじろいだ。シーボルトは景保を通して林蔵の蝦夷図をしつように所望し、そのことで景保を介して一度だけシーボルトに会っていた。そのときは師の忠告を思いだし、長崎屋の店先での挨拶にとどまった。林蔵が忠敬宅で寝起きしている頃、忠敬は息子の秀蔵に

「長崎屋には行くことならん、お前などの出入りする所ではない」と言っているのを聞いたことがあった。

日本橋石町の長崎屋はオランダ国カピタンの江戸参府の時の定宿である。林蔵は普請役の身分であつたが特命の隠密でもあつた。

景保は書物奉行の立場を利用し、長崎屋には自由に入入りしていた。

林蔵は奉行の意図を詮索しながらおそおすと答えた。

「いえ、いち度も出入りしたことはございません。どのような人物が入りするのか偵察に辺りへ出向いたことはありませんが」

「そうでござるか。それはよかった」

奉行はいずれ店持の長崎屋源右衛門にも詮議が及ぶことをほめかした。

夜も更けて暁七つの刻が近づいていた。そこに

酒肴の膳が運ばれてきた。

奉行自ら銚子をとって林蔵に酒をすすめた。そしておもむろに懷から金子包を取りだし、林蔵の前に置いた。

「これは些少ながら、今夜のお出ましの御礼と、駕籠代でござる。どうぞお納め下され」

林蔵は恐縮して頭を下げた。

「ご丁重にて有難きこと」

「それからこの書付は先刻、景保どのに書いてもろうたものでござる。ご覧下されて結構」

林蔵は半折りにした一枚の書付を手にとり文面に眼をはしらせた。景保どのの字体に相違ない。文意はこうである。

飛脚を以つて態々申述べる。一昨年シーボルトに送りし日本並びに蝦夷地の地図は、ご察度を蒙り恐れ入る事に候、之により右両図いかようにても急々取戻し、早々に送り返し給はるべく候。返戻申さずば、余は勿論のこと其の元にも罪過直ちに参るべく候。馬場為八郎にもこの意を伝え、急ぎ手段を以て取り返し、上封の上、奉行所へ差出すべし。かように従えば、其許の罪過も薄かるべしと存じ候。呉々も迅速御取戻し専一頼み存じ候。その為、態々の愚札を進候。 不具

吉雄忠四郎様

高橋作左衛門景保

この吉雄忠四郎はシーボルトの長崎での通詞、名は忠四郎ではなく忠次郎が正しい。

林蔵は言葉をはさんだ。

「恐れながら、宛名が忠四郎となっておりますが、忠次郎が正しいようで、また忠次郎直属の上司は



大通詞の末永甚左衛門様、このお名前も併記され  
たらよろしいかと存じます」

林蔵は以前、蝦夷図のことで長崎の吉雄通詞と  
やりとりしていて、書簡も受けたことがあった。  
そこには上司として末永の名も記されていた。吉  
雄個人宛よりも内容からして連名なればより重圧  
がかかるように思えた進言であった。

吉雄は一時、江戸に在って天文方和解御用に出  
仕していたが、シーボルトの江戸参府のときに、  
シーボルトと景保との間をこまめに取りつぎ、先  
年、天文方を辞し長崎に戻っていた。

林蔵のこの進言に筒井伊賀守は

「かたじけない。これは念のため景保どのに数枚  
書かせた。末永の名も加えておこう」

書付は、奉行か御目付の本目どのが、文意を指  
示し、景保の手で書かせたに相違ないと思った。  
「ところで間宮どの、今般の件は、貴殿のご進言  
に依るところが多い。事の成行から景保どのの親  
族、天文方の朋輩等にもお咎めがあるであろう。  
かようなことで、貴殿があらぬ謗を蒙ることに相  
成れば拙者も心ぐるしい。いかがと存ずるが、暫  
らくの間、身を隠されては」

林蔵が心配していた通りの忠告であった。

明日にでも江戸を離れようと決意した。

奉行所から戻った翌々日、林蔵は浅草の源空寺  
に向かった。師の伊能忠敬の墓前に事件の報告を  
し、その足で佐原に行こうと思った。佐原の伊能  
家にも調べが及ぶか、それが心配であった。

源空寺の忠敬の墓碑の隣りは、忠敬の師であり、  
景保の尊父でもある高橋至時の墓である。林蔵は  
複雑な気持ちで墓前にぬかづいた。

間宮林蔵の今日あるのは伊能忠敬のお陰と言っ  
ていい。二人は会うべくして会っていた。最初の  
出会いは寛政十二年九月、忠敬が蝦夷地東南沿岸  
の測量の帰路、箱館に戻ってきた時である。林蔵  
は松前奉行支配下役で、蝦夷地の探検踏査に従事  
していた。江戸から前年に派遣されていた幕臣の  
村上島之允の従者として伊能忠敬と面会した。

忠敬は林蔵の蝦夷地北方探検の実績を島之允か  
ら聞き、その業績を高く評価した。

林蔵も忠敬の老身ながら、江戸からはるばる海  
峡を越えて、この僻地での難儀な測量への率先遂  
行とその情熱に圧倒され、尊敬の念を抱いた。歳  
の差はあっても肝胆相照らすであった。忠敬は自  
分の歳から考えて、再びこの地を訪れることが危  
惧され、蝦夷地の未踏の部分の測量は、この御仁  
に任せられると直感し、江戸での再会を約した。  
江戸での再会が実現するまでに十一年の歳月が  
過ぎた。

この間、林蔵は東蝦夷地、南千島などの測量、  
探査に従事し、ロシアがエトロフ島のシヤナを襲  
った「シヤナ事件」にも関り、その時の武勇伝が  
江戸表まで伝わっていた。

文化五年はカラフトの探検、松田伝十郎と共に  
ラッカまで行った。

その頃、忠敬の測量行は二次、三次と続き東日  
本域のみならず西日本、九州にも及んでいた。天  
文方の下役も加わり、幕府の大事業に発展してい  
た。

文化八年五月、忠敬は九州域の長い測量の旅か  
ら久しぶりに江戸に帰る。身体も休む暇もなく地  
図作成にかかっていた。林蔵もまたこの年の初め、  
長い蝦夷地での仕事から江戸に帰り、探査の報告

書を幕府に提出、同時に著書の「東韃地方紀行」  
も上呈した。それらの功勞により、松前奉行支配  
調査役格に昇進し、報償も賜った。

林蔵は忠敬が帰府していることを知ると、手土  
産持参で深川黒江町の忠敬宅を訪ねた。忠敬が第  
二次の九州測量に旅立つ日まで、昼夜を問わず、  
忠敬から直伝の天文測量術を習った。昼は地図作  
りを手伝いながら方位や曆法を学び、夜は天測、  
夜空の星と対いあった。

十一月二十五日、林蔵は品川宿で測量隊の旅立  
ちを見送った。この時、留守居となっていた忠敬  
の息子の秀蔵と二人で御用所まで帰ってきた。旅  
立つ前夜、忠敬から送辞として贈られた奉書の書  
付を秀蔵に見せ読んで聞かせた。「贈・間宮倫宗序  
」古人言う、世に非常の人ありて非常の功ありし  
“で始まる詩文調の長い送辞の内容は間宮林蔵の  
北地での業績を讃える言葉で溢れ、なお努力して  
国につくせ、という結びである。秀蔵は黙して聞  
いていたが、気にかかったのは、父の忠敬が、“相  
親しむこと父師の如し”と言っていることであつ  
た。忠敬は秀蔵が大坂から測量隊を離脱して、江  
戸に帰ってから、秀蔵に対する態度が徐々に厳し  
くなっていた。

寛政十二年閏四月十九日、伊能測量隊は総勢六  
人、千住の宿から蝦夷地に旅立った。

伊能秀蔵十五歳、最年少の参加である。下僕の  
従者二人を除くと測量技術者は忠敬を含めて僅か  
に四人、これからの長旅の困難が思いやられた。  
佐原からは忠敬の長男の三郎右衛門景敬、秀蔵の  
祖父の柏木幸七、叔父の時右衛門も見送りに出た。  
秀蔵は四歳の時に生母を亡くし、その母が未入



籍だったために庶出の子として伊能家で育てられた。長男の景敬が三郎右衛門の名跡と、米穀商、酒造業などの家業を継いだ。二男の秀蔵は幼少時から忠敬の薫陶を受け、読み書きや算術の塾に通せられた。算術は、主流だった関孝和の関流に対抗していた会田安明の最上流和算塾に通い、父親譲りの才能で抜群の成績の子どもであった。読み書きは津宮村の久保木清淵の和槌塾で学んだ。久保木清淵は忠敬より十七歳も歳下であったが、国文学、儒学、天文学に長じていて、忠敬も師と仰ぎ信頼を寄せていた。

測量行では秀蔵は若輩ながら従者の一人として凛しく振舞った。もの覚えがはやく、仕事の手際もよく、忠敬の身の回りの世話も女房代わりにこなした。忠敬は「秀、秀」と呼んで実践の測量術を伝授した。

伊能忠敬の御用測量は蝦夷地に始まり、二次、三次と回を重ねるごとに従者の人数が増えていった。忠敬の身分も幕臣に昇格し小普請組、十人扶持、天文方高橋景保付という役職を得た。測量行は幕府直轄の事業となり、伊能測量隊は公儀測量方に変わったのである。

天文方から派遣された下役人が加わることになって隊の編成が変わった。それにより、内弟子と役人との間に摩擦がおきるのは、当然の成行き、測量技術の実践に長じている内弟子と、とかく威圧的な態度をとる役人との間には溝ができる。忠敬はそれを懸念し、両者に誓約書を書かせた。

「御用中は、旅の先々に於て威光がましいことは勿論のこと、諸事に行いを慎しんで入念にご用向きを相勤める」といった内容のものであった。これは江戸の天文方にも提出した。それでも両者の

間に反目が起こった。

役人は身分が上であるから内弟子に何かと指図する。実務よりも口が先に出る。これが不満の積み重ねとなる。また役人と内弟子とは待遇がまるで異なる。宿の部屋割、食事の内容、それに手当は内弟子の二倍、こんなことから両者に誓約に違背する行為が開始された。仮病をつかって作業を休む者、待遇の不満を口にする。隊を勝手に離れ江戸に帰ってしまった者もいた。このような規律の乱れが江戸の天文方まで伝わってしまい、高橋景保からも嚴重な注意書きが届いた。そして厳しい処分も下された。内弟子の平山郡蔵、小坂寛平は破門、伊能秀蔵ほかの内弟子にも謹慎が申しわたされた。問題が起ると先ず身内が叱責を受ける。実子の秀蔵は、この頃から忠敬の叱責の矢面に立たされることが多くなった。

秀蔵は測量の旅先でもよく勉強した。高名な数学者の会田安明の息子、尾形慶助も第二次から第五次までの測量に従事していた。秀蔵と幼な友達でもあり仲がよく、二人で神社奉納の算額の問題を考え、旅先の神社などに奉納した。このような二人を仕事第一の忠敬は心よく思わなかった。佐原の縁者への手紙にこう書いた。

「慶助は学問にのめりこみ、考え方が貴殿や私とだいぶ異なる。困ったものだ」

この批判は秀蔵にもおよび「秀蔵も学問をすればするほど人が悪くなっている。秀蔵と慶助は地図の仕事は付けたしである。この短い夜に何時に寝ているのか判らない。そして体をこわし、仕事も無精になつていく」

忠敬に小言が多くなった。持病の喘息が出て測量を休むことも出始めていた。

「背中をさすれ、肩を揉め」と秀蔵をよびつける。意にそわないと癪癪がおこる。

文化五年の秋、秀蔵は病いに罹り半月病床に伏す。測量隊は秀蔵を大坂に残し大和路へ向かう。小康を得て江戸にもどった秀蔵は一年ぶりに深川黒江町の御用所に入る。測量隊が帰府するまでに、持ち帰った資料の整理に明けくれた。

これ以後、秀蔵は測量の旅に出ることはなかった。深川黒江町の留守居を預かり、天文方と佐原の伊能家との連絡役として旅先からの忠敬の指示をこなした。忠敬が旅から帰れば測量図作成の仕事にも従事した。

(続く)



## 加賀藩測量の足跡をたどる(四)

寺口 学

### はじめに

石川県支部による伊能忠敬加賀能登測量の足跡をたどる現地調査は、四回目を数えることとなった。

享和三年（一八〇三）第四次測量で北陸・能登国に足を踏み入れた忠敬一行は、今浜村（現在の宝達志水町）で二隊に分かれた。七尾方面の内浦（能登半島東岸部）を忠敬ら五名、輪島方面の外浦（能登半島西岸部）を弟子の平山郡蔵ら三名が測量している。

平山隊のルートと宿所等については、七十六号で深見村（現在の輪島市門前町深見）まで報告した。今号では、二〇一四年一〇月五日、その続きとなる輪島市皆月から輪島までたどった模様を述べたい。また同日には、忠敬隊が測量した現在の七尾市田鶴浜・穴水町川島間も訪れており、併せて報告したい。

なお、この日は、河崎・室山・



今回の足跡をたどる旅付近の伊能図  
（『伊能図大全』河出書房新社より）

相良・寺尾・寺口の五人が参加した。

### 一、輪島市門前町皆月・河井町（外浦）

#### ①皆月村・宇兵衛（7/11）

折しも、当日は、台風一八号が北陸に接近しつつあり、ときおり小雨の降る中、調査が行われた。能登と金沢をつなぐ「のと里山海道」の「道の駅 高松」で会員五名が落ち合い、筆者の自家用車に乗り合わせて一路、輪島方面に向かった。

一時間半ほどかけて到着したの

が、輪島市門前町皆月である。「間垣（まがき）」と呼ばれる、強風と塩害から家屋を守る竹の垣根が美しい集落である。

『伊能忠敬測量日記』（以下、『日記』と表記）によれば、七月一日に当地の「宇兵衛」宅に宿泊している。『新修門前町史資料編三』には「宇兵衛」、「組合頭宇兵衛」とあり、平山一行が訪れた当時も村役人であったと思われる。しかし、今回は宇兵衛の宅地跡や子孫に関する情報を得ることはできなかった。



左手が皆月集落・右手は五十洲集落（北側高台より撮影）

#### ②上大沢村・六左衛門（7/12）

『日記』によれば、平山隊は同一日に皆月村を出立し、次の上大沢村方面へ向かっている。その際、「鋸崎」を通ったとあり、これは現在も同じく「ノコギリ崎」と称されている場所で、宝永元年（一七〇四）ごろの『能登一覽記』に「のこぎりば」と見える岩山の崖地である。皆月の南側に位置する五十洲集落から北方向に見渡すことができ、現在は遊歩道が整備され、皆月から上大沢まで歩くこと



ができる。しかし当時はまともな道もなかったであろうし、現在で



間垣が連なる上大沢集落（集落北側より撮影）



ノコギリ崎（五十洲集落より撮影）

### ③赤崎村・忠左衛門（7/12）

この集落も間垣が美しい。関東からやってきた平山たちは、今と同じような風景を珍しそうに眺めたことであろう。なお、今年三月末から九月末にかけて放映されたNHK連続テレビ小説「まれ」の住む「外浦（そとら）村」は、この上大沢地区を主なロケ地としていたので、この風景を懐かしむ会員もいらつしやることだろう。

も地質がもろい場所では、地滑りが起きているため、そのような危険な場所を測量していたのかと思うと冷や汗が出る。

さて、一行が危険な岩場沿いを通り樽見村を経て、次に休みを取ったのが上大沢村の「六左衛門」宅である。『輪島市史資料編第一巻』に「肝煎六左衛門」と見える人物が、平山一行が出会った「六左衛門」につながる人物であろうと思われるが、これ以外の史料が見当たらず、宅地や子孫の確認には至らなかった。

この先、私達は県道三八号を北東方向に進み、平山一行が一二日に宿泊地とした「赤崎村忠左衛門」宅を目指した。

『日記』には、「赤崎村（此村下大難所。崩石多し。人家ハ山の中腹に住。）十町余海辺より上りて止宿」とあり、現在の集落は標高七〇ほどの高台に位置し、県道沿いに神社や家並みが続いている。測量隊が宿泊した「忠左衛門」に関する手がかりは、やや時代が下るが明治五年（一八七二）に「肝煎山崎忠左衛門」と記された文書がある。ほかに史料が見当たらずやや心もとないが、『西保村史』によれば赤崎集落で一軒のみ山崎家（屋号アタシヤ）が確認でき、おおまかな位置も記してあった。しかし、『住宅明細地図』には掲載されておらず、集落を訪れた当日もほとんどの家が不在で、明確な場所を特定することはかなわなかった。後日、赤崎町区長と連絡を取ることができ、山崎家は現在無住で、廃屋が残るのみとの話であった。

### ④輪島河井町・木下与次兵衛（7/13）

その後、集落を再訪し、旧山崎家の隣家の方にお聞きしたところ、同級生がいたが他所へ転出したとのことであった。

なお、この赤崎村は、嘉永三年（一八五〇）藩主前田斉泰による能登海岸巡視に際して休憩場所となっており、現在でも斉泰が腰を休めたという「御腰懸所」の旧跡が伝えられている。



赤崎集落（左手家屋の裏手に山崎家があった）





八王子権現社の入口石段

山村『日記』には「海辺にあらず、岡村である」を経て、途中「小鵜入」(『日記』では「鵜入村の内」とするが現在は小池町地内) 周辺で舟を使って測量をしている。その先、海岸は通行不能であるため山道に入っているが、この地を「八町地」または「八王子」と記している。これは、現在の小池町地内で、「小池口」のバス停近くにある「八王子権現社」に由来する名称である(『西保村史』)。八王子大権現は、海岸から五〇〇ほど離れた標高約一三〇の場所にそり立つ巨岩を神体としている神社である。石は地中深くまで延びて、その下に潜んでいるナマズの頭を押さえて地震が起これないようにしているとして「地震岩」とも称される。訪問時は、参道が草木に



「地震石」とも称される八王子大権現の巨岩

覆われていたため、近づくことが出来なかったが、遠くから見ても圧倒される大きさと、まさに神が宿る磐座(いわくら)としての威厳が感じられた。

さて、一行は山道を通って光浦村の海岸に出た。輪島の手前で「天神山」(現在の輪島崎町地内)を越えており、この山がある岬を「加茂浦岬」と記しているが、現在は天神山の北側の海辺を「鴨ヶ浦」と称している。そして、輪島川(河原田川)に架かる「板橋」を越え、次の宿泊地である河井町の「木下与治兵衛」宅に至っている。

輪島は、河原田川の西側を鳳至町、東側を河井町と呼び、両町をつなぐの「いろは橋」であり、『日記』



「完全復元伊能図全国巡回フロアー 展 in 金沢工業大学」にて

に見える「板橋」はこれを指すのであろう。

「木下与治兵衛」については、『輪島市史資料編第四巻近世町方海運・近現代』に「組合頭 与次兵衛」とある。「治」が「次」となっているが、同人としても良いのではないだろうか。子孫や屋敷地については、現在、河井町地内に木下姓が三軒あり、確認してみたが心当たりがないとの返事で、特定

することはできなかった。このあと私達は、輪島市(珠洲市に至る外浦の調査を一旦止め、忠敬隊が測量した内浦側の穴水(田鶴浜の調査に向かった。



鳳至町と河井町をつなぐ「いろは橋」



「能州道中図」輪島部分(石川県立図書館所蔵) 右が鳳至町、左が河井町(方角は下が北)



## 二、鳳珠郡穴水町・七尾市田鶴浜町（内浦）

### ①川嶋村・池田栄齋（7/13）

忠敬隊は、田鶴浜から穴水へと、北に向かって測量を進めて行つたのであるが、今回は、時間的な制約もあったため、逆に南下するルートで宿所探しを始めた。

まず、七月一日に宿泊した川嶋村（現在の穴水町川島）「池田栄齋」宅を指摘した。池田家は、天



「伊能忠敬投宿地（池田栄齋宅跡）」の案内板

領であった川嶋村の庄屋を代々務めた家柄である（『穴水町の集落誌』）。屋敷跡地に関する情報は事前に得ていたため、のと鉄道七尾

線穴水駅近くにある該当地へ向かった。現在は、個人宅の駐車場と駅へ続く道路の一部となっているが、訪れてみると驚いたことに「伊能忠敬投宿地（池田栄齋宅跡）」と記された案内板が設置されていた。穴水町と穴水町まちなか再生協議会が設置したもので、池田家の由緒や忠敬が現在の穴水町内で宿泊した六家とその位置を示した地図が描かれている。石川県内では初めてとなる忠敬の足跡を示した野外的案内板である。（七十六号既報）県内に、今後そうした案内が増えてくれば嬉しい限りである。

### ②乙ヶ崎村・田尻源内（7/12）

続いて、同月一二日に宿泊した乙ヶ崎村（現在の穴水町乙ヶ崎）の「田尻源内」宅へ向かった。事前の情報により屋敷地の見当をつけ、近所のおばあさんに場所をお聞きしたところ、「ゲンナイサはそここの畑だよ」と屋敷跡を教えてくれた。裏手の高台には墓石も数基残されていた。墓の中で最も南側



田尻源内家の屋敷地跡（墓地は左手高台）



田尻源内家の墓石



にある墓石の裏（西面）には「田尻源内」と陰刻され、その一段下には四人の法名が記されていた。没年は文化八（文政七年（一八一）一（一八二四）で、うち一人は女性であることから、残る三人中の

誰かが忠敬が出会った源内の可能性がある。お話を伺ったおばあさんは、自分の家の土地も元々は田尻家の所有地で、昔は相当広い敷地をもっていたのではないかと話してくれた。『日記』には「家作大にして宜し」と記しており、繁栄していた様子がうかがえる。なお、子孫の方は転出されているとのことであった。



池田栄齋屋敷跡（写真中心が案内板）

### ③外村・助左衛門（7/11）

さて、同月一日は深浦村にて昼食をとり、宿泊は外（そで）村（現在の七尾市中島町外）の「助左衛門」宅であった。事前の調べ





室木家（現在は「明治の館」として一般公開）

によると、天領であった外村の庄屋室木家は代々「助左衛門」を名乗っており、『中島町史 史料編下』享和元年（一八〇一）の史料に出てくる「外村庄屋 助左衛門」が忠敬をもてなした当時の主人であろう。

現在の室木家は、明治一二年から一〇年がかりで造られた、合掌組入母屋造りの豪壮な建物で、七尾市の管理の下「明治の館」として一般公開されている。家屋内を見学しながら、館員の方に伊能忠敬についてお聞きしたところ、宿泊については聞いたことがあるとのことであった。今後、忠敬宿泊の史実も案内してはどうかと提案



「洋装なかむら」と田鶴浜の通り

④田鶴浜村・中村屋五郎右衛門（7/8・9）

今回の調査では最後となる、八日・九日連泊した田鶴浜村（七尾市田鶴浜）の「中村屋五郎右衛門」宅に向かった。中村さんは衣料店を営んでおられるが、火災にあって残っていないとのことであっ

したところ、ぜひ市役所に働きたいとのことのお返事をいただいた。次に、一〇日に宿泊した中嶋村（七尾市中島町中島）の「組頭与左衛門」宅については、私達が訪れた際は情報が少なく、屋敷地の特定には至らなかった。

た。だが、「神仏の真似しても、五郎右衛門の真似するな」といわれていたとのことで、「五郎右衛門」を名乗っていたのは確実であろう。『日記』には「家作よし」とあり、それなりの家構えであったと思われる。

#### おわりに

今回の調査では、二手に分かれた平山隊と忠敬隊が巡った、輪島市皆月・同市河井町間、穴水町川島・七尾市田鶴浜間を訪れた。

外浦側については、具体的な宿泊地として赤崎村が判明した程度で、今後さらなる調査が必要となる。それに対し、内浦側については、ほぼ宿泊地が明らかとなったのみならず、穴水町川島の池田栄斎家跡地には、伊能忠敬が訪れたことを紹介した看板が設置されていたことに、驚きと喜びを感じ得た。

伊能忠敬自身の功績は、今となっては多くの人々の知る所となっているが、能登・加賀を訪れてい

た事実については、ほとんど知られていないのが現状である。今後、研究会の活動を通じて、忠敬を身近に感じてもらえるよう、勤めていきたい。

最後となったが、調査に際して協力してくださった皆様に、改めて感謝を申し上げたい。



「完全復元伊能図全国巡回フロアー 展 in 金沢工業大学」にて

※今回は、昨年の探訪報告である。今年五月に輪島市・珠洲市、七月に能登島探訪を終えた。あと三回で加賀藩全域の探訪を終える予定である。



空撮散歩

伊能測量隊の足跡と福島町のできごと

北海道福島町 中塚 徹朗

先の8月30日に開催された北海道福島町「第13回「千軒そば」の花鑑賞会」。日経新聞(全国版)でも取り上げられた。蕎麦の真っ白な絨毯の上で伝統の松前神楽を奏上する福島町ならではのイベント。33座のなかから、

毎年5座ほどの神楽が奏上される。多くのカメラマンの注目の的が写真の八乙女舞。花の中に埋もれて幻想的だ。加えて朱色の巫女の袴と白の花とのコントラストが眼に焼き付く(写真1)。約一ヶ月後、神々の祈りを湛えた美味しい新蕎麦が地元千軒そば店で提供される。(写真8)

蝦夷地測量の往復路  
忠敬さんは、このイベント会場のすぐ横を測量



写真 1. そばの畑で舞う幻想的な松前神楽八乙女舞

して行った。知内川を渡ったすぐ近くの一ノ渡(イチノワタリ)で帰路昼食を一行はとったと測量日記にある(写真2参照)。そば好きで有名な忠敬さん、当時とれたての新ソバを食していたのかも知れない。

伊能測量隊の測量成果を点線で示す(写真2)。蝦夷地測量開始2日目。5月21日(新暦7月12日)



写真 2. 伊能隊の測量経路と現在の神楽を舞うソバ畑。川をはさんだ一ノ渡で一行は昼食をとった

(ドローンで撮影)

の測量日記には「福島より七里十丁四十八瀬と云小川ヲ数十度越渡る」とある。数多く渡ることから「四十八瀬」という地名になった。当時の蝦夷地の街道は、このよう

に川岸を歩くことが多かったのだろう。つづく山並は茶屋峠。ブナ林を中心に鬱蒼と草木生い茂るこの時期は現在でも熊も虫も多くて、さぞ一行は難儀したことだろう。



写真 3(右) 千軒一ノ渡上空から福島町を望む

忠敬さん一行の測量日は新暦 7 月 12 日。空撮日は 2015 年 7 月 15 日。イチノワタリとトチマツ。文政大図に書かれた地名を記した。残念ながらトチマツという地名は現在失われてしまった。

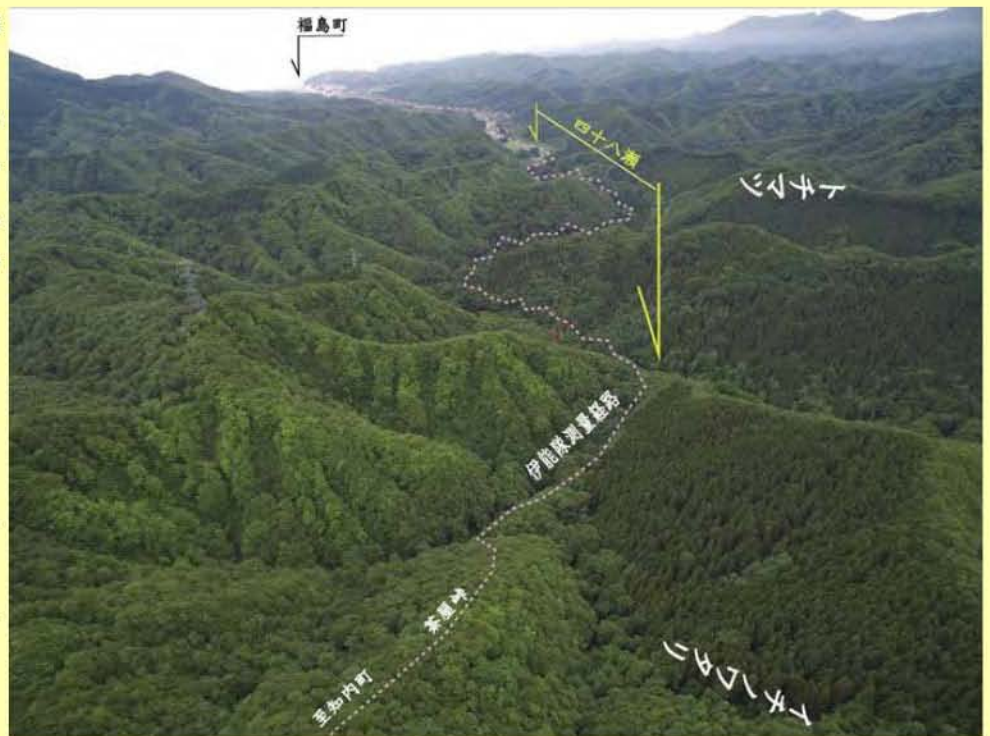


写真 4(下) GPS ロガーの測量ラインと忠敬さん(実は間宮林蔵)測量のラインを比較すると大難所での測量とは思えないほど良い精度に見える。

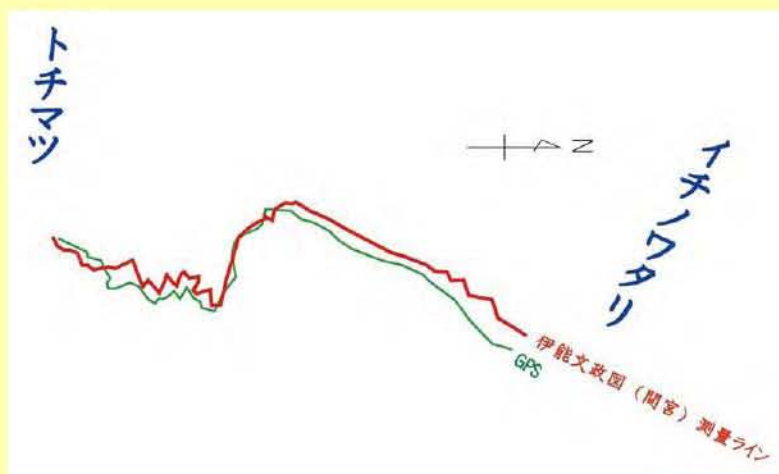


写真 5 は、写真 2 と同じ構図の空撮だが、新暦 11 月初頭の茶色一色の(一行が通った頃の)季節感を見て頂きたい。蝦夷地測量帰りも忠敬一行は福島町を測量。9 月 16 日(新暦 11 月 2 日)知内町を出立(行程四里半一ノ渡に而中食、夫より二里半七ツ時福嶋へ着、止宿、夜晴測量」と、ここ福島町字千軒一の渡で昼食を取る。ちよう

ど 7 年前(1793 年)、松前へと向かうラクスマンと大黒屋光太夫一行がやはり一ノ渡で昼食を取っている。(ラクスマン一行、実は隠れて函館・松前間の測量をしていた。)

写真 5. 空撮日は 2014 年 11 月 5 日。初冬の色合い。いつ雪が降っても不思議では無い。66 日間平均 20km/日と急ぎ足での蝦夷地(松前ー別海)測量であった。



## ◇伊能測量隊を顕彰する

### 春秋のイベントの開催

伊能測量隊が測量した古道を歩くイベントを地域の方々と開催している。「殿様街道ウォーク」と称して、春と秋の年2回開催している。今年の春で20回目。約7kmのブナ林の古道を3時間ほど散策する。テーマは歴史・自然・食・伝統。歴史の説明と花や樹木等の説明を聞きながらの散策。下山後、「千軒そば」と「松前神楽」を堪能するという内容だ。5年ほど前GPSロガーでとったコースの軌跡をGoogle Earthに張り込み、文政大図の測量ラインと比較してみた。(写真4参照)驚くべき古道の軌跡が感動とともに現在に蘇った瞬間を思い出す。それ以来、この道は自信を持って「伊能・間宮測量の道」と説明している。秋の開催は10月末の日曜日を予定している。是非みなさん一度いらっしやってください。



写真 6. 春の街道ウォーク 歴史の説明をする筆者



写真 7. 秋の街道ウォーク  
250 オの巨木ブナと親しむ

### ◇ヒヨドリの群れと忠敬測量隊

「此日朝飯御同所弁天の前山に登て大嶋・小嶋其外量、午中より風宜由二付乗船出帆」  
一行が蝦夷地測量を終え松前から松前侯の御役船に乗って三厩

へと渡ったのが寛政12年9月16日。新暦では11月2日だ。写真9・10をご覧いただきたい。毎年10月下旬から11月上旬、北海道最南端の白神岬では南へ向かう野鳥の渡りのピーク。松前から三厩へ向け津軽海峡を渡るヒヨドリの群れである。私はこの時期かかさずカメラを構えて白神海岸で撮影に挑む。海峡へと飛び立つヒヨドリの音や



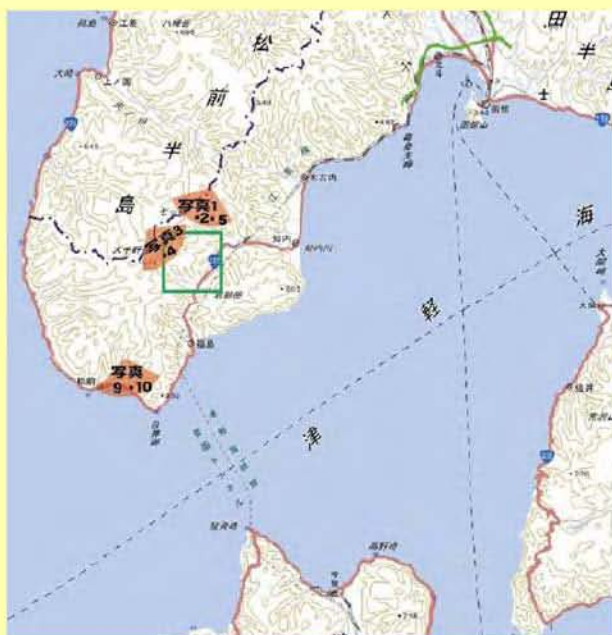
写真 9. 毎年10月下旬から11月上旬、白神岬から一斉に飛び立つヒヨドリの群れは対岸の龍飛岬へと向かう



写真 8. 千軒そば 忠敬さんも食べただろうか？

群れにまみれるとまるで夢見心地。感動が海を渡るのだ。蝦夷地測量を無事終え安堵の気持ちの伊能測量隊一行をこの何百何千という鳥の群れが祝福していたとしても不思議では無い。





写真撮影箇所図。(国土地理院ウォッチ図)



写真 10. 蝦夷地測量を終え松前から三厩へと向かう伊能忠敬の乗った舟はヒヨドリの群れに祝福されただろうか？

幻のフロア展

二〇一一年一月十二日から二〇一一年八月三十一日まで毎週、福島民友新聞に「伊能測量隊 東北を行く」と題して、本会会員・松宮輝明さんによる伊能測量隊の東北地方各地の測量記録が測量日記を辿りながら、その土地の様子も含め二五回の連載記事として掲載されました。

この記事は、同年四月二十九日から五月一日

開催の「伊能忠敬復元地図フロア展」郡山」のための連載記事でしたが、三月十一日の東日本大震災のために「幻のフロア展」となつてしまい、後日記事だけが連載されました。東北復興のため、改めて伊能大図展の実現に向けて準備が進められています。

新聞掲載から四年が経過しましたが、記事は現在も福島民友新聞社のホームページに掲載されています。URLは左記の通りです。

<http://www.minyu-net.com/serial/inou/>

minyu-net  
福島民友

【ANA】リュッセル新規就航  
フルフラットシートで快適な旅へ！ 平日でも楽しめるリュッセル旅行。

>

通話 ホーム 県内 県外 スケジュール 投稿 ページント 観光 ツーリズム 健康・美容 家族旅行

江戸時代の測量家、伊能忠敬(いのうだてただちか)にスポットをあてた連載企画。東北・福島地方の測量の歴史、県内にも足を運んでいます。当時の伊能の活躍、功績を伊能忠敬研究所(東北・東北支那系で日工科大学非常勤講師の松宮輝明さん)が紹介します。

- [25] 17年にわたる全国測量 一步一步が大きな成果に
- [24] 節代で日食観測 悪天候で「成功せず」
- [23] 秋田路 小野町町の生涯に趣味
- [22] 岬を潤す「雲の清水」 伊能松尾芭蕉を思う
- [21] 山形路を行く 米沢藩の記録から欠如
- [20] 松原峠を越える 会津と米沢を結ぶ要衝
- [19] 大蛇峠を越える 家人に一筆しただめ
- [18] 大塩村の山荘 「甚だ白く、味は甘味」
- [17] 米沢街道 道中の村に止宿の手配
- [16] 磐梯山の標高測る旅 鶴ヶ城の美しさに感嘆
- [15] 猪苗代城を遊覧す 噴火前の火山帯を見
- [14] 勢至堂時を行く 貴重な歴史語る「一里塚」
- [13] 上小原陣の山内茂守宅 日記に「家作よし」と褒める
- [12] 賑わう会津街道へ 「幕府の御用」と止宿を通知
- [11] 第3次測量隊の宿 日坂村で緯度の天体観測
- [10] 第3次で会津を測量 国家事業の大命を受ける
- [9] 碑文に語る謎の遺言 地球の微動説明「項の式」
- [8] 第2次測量隊沿道を行く 界内測量で16日間宿泊
- [7] 俳諧にも染み 落語 俳句のまち須賀川に足踏
- [6] 第1次測量隊、樹木地へ 正確な測量、幕府で感心
- [5] 第一次測量隊結成 子午線の長さ測る旅へ
- [4] 幕府天文方に入門 隠居後、秘術派、道角
- [3] 生い立ち 学問好きで多くの逸話
- [2] 「伊能忠敬図」炎上す アメリカで「大図」発!
- [1] 国史館と伊能図発見の経緯 日本地図

伊能忠敬測量隊  
東北を行く

松宮 輝明

福島民友新聞社  
〒960-8648 福島県福島市都賀4の29  
個人情報の取り扱いについて | リンクの設置について | 著作権について  
国内外のニュースは共同社社社の配信を受けります。  
このサイトに記載された記事と重複する情報の無断転載を禁じます。copy

東北初公開  
伊能忠敬復元地図  
国家指定記念

伊能忠敬復元地図  
フロア展 in 郡山

人足地所  
1000坪

上: 福島民友新聞のホームページ  
右: 幻となったフロア展のポスター

今、蘇る伊能大図

4月29日(土)~5月1日(日)  
ビッグバレットふくしま  
伊能大図(大図)展示

ご遠方下さい  
【お問い合わせ】  
郡山ライオンズクラブ事務局  
☎024(922)8942



平成27年度

## 九州支部例会報告

九州支部事務局長

井上辰男

恒例の九州支部例会が平成27年7月11日(土)午後1時から例年同様「福岡市立南市民センター」において16名の出席を得て開催しました。

冒頭石川支部長より、本部・支部関係事項報告あり、ゲスト参加の佐賀県嬉野市から中野登氏、山口県宇部市から溝淵義雄氏の紹介後、物故者となられた松尾昌英元会員、中富道利会員のご冥福を祈り黙祷をささげ講演を始めた。



最初に松尾卓次氏から「伊能忠敬と島原測量」の講演で、松尾氏の地元島原領内の測量をスライドを使い詳述され、続いて池田一樹氏から「長門・周防(海岸線)の伊能測量について」の講演で、山口県萩市沖の見島について発表があった。



次に平川定美氏から「佐世保伊能忠敬測量記念碑のその後」で平成26年5月に完成した記念碑の諸問題について報告され、引き続き事務長から「北九州市伊能忠敬献花の集い」についてスライドを使い紹介した。

休憩後、原口光和氏から「今後の人口問題と健康について」の講演で、皆様関心がある少子高齢化の生き着く先、健康維持と老後の生き方等についての お話があり、続いて山田洋氏から「完全復元伊能図全国巡回フロ



平成27年度 伊能忠敬研究会九州支部例会  
H27.7.11 福岡市南市民センターにて

ア展「唐津を終えて」の講演で、唐津が全国巡回フロア展最終開催で有終の美で飾ることができたこと、事前に「伊能測量隊の足跡をたどる歴史探訪ウォーク」を実施したこと、活動記録展が馬場良平会員を中心に開催されたこと等の報告があった。そのあと井上辰男氏から「伊能測量隊 坂部貞兵衛支隊長の墓をたずねて」の卓話があり、墓碑、伊能忠敬天測之地記念碑等をスライドを使い紹介された。

最後に事務長から会計報告、遠藤会員から監査報告、石川支部長から会員動向等報告後、恒例の記念撮影をおこない17時に閉会した。

続いて場所を移し懇親会に入り、事務長の司会で若手遠藤さんの乾杯が始まり、全員のスピーチで大変賑やかなひとときを過ごし、最後は遠路出席の平川さんの中締めでお開きとなりました。忠敬先生を語る有意義な一日を過ごすことができ、皆様おつかれさまでした。



会員便り

## 「測量の日」雑感

藤沢市 大沼 晃

六月三日は「測量の日」である。日本で測量の意義や重要性を国民に広く知らしめるために、平成元年に建設省(現在の国土交通省)によって制定された。その趣旨を受け、(一社)神奈川県測量設計協会は六月二日神奈川県民ホールで国土地理院応用地理部の倉田一郎氏を講師として招き記念講演会を開催した。

協会長のオープニング挨拶の中で、測量に関して江戸時代に大活躍した伊能忠敬と日本の近代化の幕開けであった明治時代の黎明期に、全国の地図を完成させる測量の物語として新田次郎が取り上げた小説「剣岳点の記」に登場する陸軍省陸地測量部測量官・柴崎芳太郎の業績について



て触れていた。その後、今日に至るまで測量関連で特筆する人物が出ていないと残念そうに語っていたのが印象的であった。

協会が配布した一連の資料の中に協会の年誌があり、その冒頭に「測量は、古代から現在まで私たちの文明を支えてきた最も基本的な技術です。古代エジプトではピラミッドの建設に高度な測量技術が用いられ、また、我が国では江戸時代に日本全国を实地測量して驚くほど正確な日本地図をつくった伊能忠敬の業績が広く知られています。――(後略)――」と記述している。忠敬先生の業績に触れたこの条を読み、伊能忠敬研究会の会員として満足感に浸りながら帰宅した次第である。

一方、測量官・柴崎芳太郎の業績に関する物語は、以前、映画「剣岳点の記」を観賞しある程度の知識は持っていたが、あまりにも雄大な山岳風景の画面に心を奪われていたようで、詳細に関してはうろ覚えであることに気づき、改めて本を読むことにした。本を読み進むにしたがい測量と言う共通点があるためか次のような伊能忠敬と柴崎芳太郎との類似点を感じ取った。

(一) 上下左右を問わず人間関係に気配りが出来る人たちである。

特にIIホウ(報告)レン(連絡)

ソウ(相談)IIが適時的確になされている。伊能忠敬の時代は封建時代で身分制度も厳しく、しかも幕府のご意向ありとは言え、他藩との折衝は難儀の連続であったと思う。しかし、柴崎芳太郎の場合は、統一された日本国家の下で軍隊組織で、上意下達の世界であったので比較的動きやすかったのではないだろうか。

(二) 仕事へのプライドを有しているながら、けしておごり高ぶるようなことを見せず、チームワークを大切にして人々たちである。

伊能忠敬は、あるトラブルから師である高橋至時にいさめられたり、師の留守を預かる間重富からいろいろと助言を受けたという一面があるが、伊能測量隊の間では和が保たれていたようだ。

柴崎芳太郎については筆頭案内人の長次郎を全面的に信頼し、いろいろと助言を受け入れて諸々の差配をし、仕事の上でも初登頂を部下に譲り花を持たせている。危機管理に関してはリーダーシップを遺憾なく発揮し、リスク回避に努め強固なチームワークを維持している。

(三) 成功への道筋を常に身につけていた人々たちである。

五月十七日(旧暦では四月十三

日)は伊能忠敬の命日である。その日に因み、日本テレビの「鉄腕ダッシュ」という番組で三浦半島城ヶ島を舞台に伊能測量の再現風景を放映したが(実際は悪天候で伊能測量隊は未測量であることが測量日記に記述あり)、平地での歩測や岩場で間縄を使つての測量、足を踏み入れることの出来ない断崖での測量、また、宿に帰ってから測量データを基に縮尺換算しながら作図する場面などがあり、短い映像情報であったが、当時の伊能測量隊の苦労を改めて理解することができた。日々、妥協せず、にコツコツと積み重ねを繰り返すことが精度の高い地図の完成に結びついたと改めて認識した次第である。

片や、現在国内のどこにでも気軽にかけることが出来るのは、正確な地図のお陰であるが、その地図は全国のいたるところに設置された三角点に基づいて作られていると、今回本を読み実感した。(二年前、銚子研修旅行会の折に実物を見ながら説明を受けたが、受身であったため実感に乏しかったこと恥じる次第である)

三角点がある場所には「柱石」という石が埋められており、それ

が経度、緯度、標高の基準となっているとのこと。三角点を設置するためには、①事前調査、②地形偵察、③選定、④造標、⑤埋石、⑥観測という定められた手順を踏み、そのために測量官たちは道なき山谷に踏み入り、例えば暑くても寒くても何日もテント生活を続けたのである。今のような便利な装備がない時代のことであり、苦勞の程は伊能忠敬の時代と甲乙付けがたい。

本の題名の「剣岳 点の記」とは、五万分之一の地形図作成のために三等三角点網を完成させるべく、北アルプス剣岳へ登頂し三角点を埋設した物語であるが、三角点標石を埋めた年月日や人名、測量観測の年月日や人名などと共に、その三角点に至るルート、人夫代、宿泊先などの諸費用など必要事項が記録されているものが「点の記」である。柴崎も伊能と同様宿でもテントの中でも克明に記録を続けた。その個々の記録が明治二十一年以降、永久保存資料として国土地理院に保存されているとのこと。伊能測量日記は国宝になった。「点の記」もいずれは国宝に順ずることを願ってやまない。



## 二〇一五年度総会の報告

①散策会(日本橋↓茅場町↓門前仲町)

六月二十七日十一時、参加者十九名が日本国道路元標に集合。天気予報では降水確率が高く雨の散策会と覚悟していたが、傘の出番はなく曇り空の下、富岡八幡宮まで歩けた。

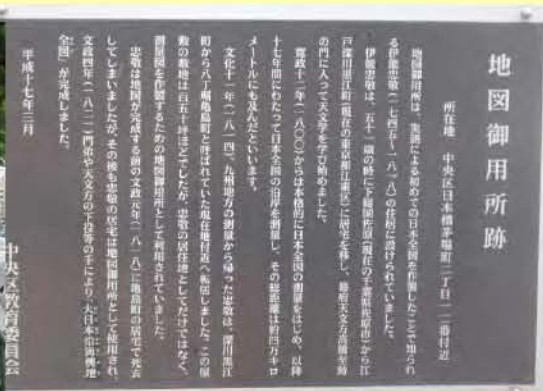
日本橋は五街道の基点であり忠敬の測量の基点ではなかったことだろう。それでも江戸日本橋を忠敬は何度となく渡ったに違いない。

中央通りと永代通りの交差点「日本橋」を左折し、一路茅場町へ。東京メトロ日比谷線の茅場町駅一番出口近くに「地図御用所跡」の看板がある。平成十七年に中央区教育委員会が建てた案内板には、深川黒江町から八丁堀亀島町へ転居後、居住地としてだけでなく、測量図を作成するための地図御用所として利用されたこと。忠敬の死後も同所で門弟や天文方の下役らの手によって「大日本沿海輿地全体全図」が完成したと記されている。

車。残りの十一名は隅田川に架かる  
永代橋を越え、門前仲町に十二時過  
ぎに到着。



説明版に見入る参加者



地図御用所跡の説明版

講演会。榎本隆充先生「榎本武揚のシベリア横断旅行とシベリア日記」。

箱田良助の子孫、榎本武揚の玄孫に

あたる先生から知られざる榎本武揚の一面と苦勞話を、興味深く拝聴することができた。

忠敬のように測量、地図製作はしなくとも、シベリアで砂鉄が採取できることを調べ、武揚が地理学者であったこと。忠敬は『測量日記』を残しているが、武揚は『シベリア日記』を認めている。その内容について、後に金田一京助氏が民族的な視点で物事を表現している」と評価している。

また武揚はオランダ語で「冒険は最大の志なり」と名言を残している。これは忠敬の第二の人生で、偉業を成し遂げたことと同様に、現代に生きる我々に生涯現役とい



講演する榎本隆充先生

うメッセージが込められている。  
先生がお持ちになられた『シベリア日記』（絶版）の文庫本五冊は完売となった。

講演終了後は、二〇一四年度の活動報告、収支報告が行われた。新理事に編集担当の山本さん。事務局長の鈴木さんが退任されて、菱川さんが就任。

会員からの質問もあり、参加型の  
総会となった。

総会終了後、一同記念撮影のため一階玄関へ。

③懇親会(四十九名出席)



講演に聴き入る参加者たち



予定通り十七時開始。司会は小生。乾杯の音頭は榎本先生。しばしの歓談後、スピーチタイムへ。毎回お馴染み、司会が勝手に会員を指名してお話しいただいた。

まずは三名の新入会員。総支配人である橋本さんのホテルは、第九次測量の止宿となった所。工業高校の中村先生と町田在住の渡邊明男さんは若手の会員。その後は遠方からお越しの順に北海道の会員、石川・九州支部の皆さんが各々近況報告を熱く語っていただいた。

その他、伊能敏雄さんからも大河ドラマの現状報告、河崎さんから没後二百周年記念誌発行に向けての取り組み等の報告があった。若干一時間三十分足らずであったが、会員同士の交流、意見交換が活発に行われ



総会参加者の記念写真

た。中締めは渡辺一郎名誉代表。終日梅雨空ではあったが、富岡八幡宮は年に一回の忠敬談義に盛り上がった一日となった。

(新沢 義博)

## フォーラム「伊能忠敬の世界」の開催予定

大河ドラマ「伊能忠敬」推進協議会がフォーラム「伊能忠敬の世界」の開催を予定しています。

2017年の大河は井伊家の先祖話に決まったようですが、伊能忠敬を大河ドラマにと頑張っている香取市の大河推進協議会が12月の行事を左記のように予定しています。研究会関係者が係わっております。多数御参加をお願いします。

- ① 期日 平成27年12月12日  
13:00～16:30
- ② 場所 佐原文化会館  
入場無料 定員780名
- ③ 構成 第1部 講演
- ④ 主催 伊能忠敬大河化推進協議会(会長 木内志郎)
- ⑤ 特別後援 香取市
- ⑥ 協賛 伊能忠敬顕彰会、伊能忠敬研究会、佐原商工会議所、その他

白駒妃登美さん(博多の歴女)  
第2部 緑のパネルフォーラム  
間宮林蔵子孫、伊能洋、榎本隆充、渡辺一郎、源空寺住職などに交渉中

第3部 行政代表者懇話会  
香取市長、東金市長、九十九里町長、横芝光町長、多古町長、江東区長、台東区長、中央区長、つくばみらい市長に交渉中

## 会誌76号訂正

前号の会誌の以下の箇所についてお詫びして訂正いたします。(編集担当)

- ・7p 上段 後から7～6行目  
(誤) 上杉景勝(一五五年～一六二三年)  
(正) 上杉景勝(一五五五年～一六二三年)
- ・9p 下段 左下航空写真(現在も残る江戸時代の地割)差し替え  
赤い線が消えていました。下図と差し替えて下さい
- ・13p 下段中央 ■原宿と富士山の距離の式  
(誤) 三十三町五十二間  
(正) 三十三町五十〇間





資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十三回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

(今回より改訂増補部分を朱書きで区別していない)

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第七次測量】(九州第一次) 豊前小倉く鹿児島く宮崎 自 文化7年1月1日 至 文化7年4月21日

14			13		12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	文化7年1月(1810)	宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(17)	後手中食	先手中食	(16)	中食	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(2, 4)								一七八
柄杓田村	喜多久村	白野江村	田野浦村	門司村	大里村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	小倉城下船頭町				福岡県北九州市小倉北区	宮崎要助	一同休、試豪。江戸へ年首状を認む。 恒星測定		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同									
北九州市門司区	北九州市門司区	北九州市門司区	北九州市門司区	北九州市門司区	北九州市門司区																			
一向宗西派光照寺	百姓善之丞	庄屋七兵衛	本陣鈴木久左衛門 三原屋為左衛門	庄屋甚五郎	本陣重松彦之丞	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	宮崎要助								
		白野江村枝青浜、黒小石出で基石に類す。			宝町秋月街道三辻より初む(即ち印石据込む)				臼杵候より丹後縞袴地等贈り物あり。	恒星測定	午中を測る。恒星十余星測る。	恒星十余星測る。			恒星測定	一同休、試豪。江戸へ年首状を認む。 恒星測定								
一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八											一七八								



2 3	2 2		2 1		2 0			1 9	1 8	1 7		1 6		1 5		宿泊日・旧暦
( 2 6 )	( 2 5 )	中食	( 2 4 )	中食	( 2 3 )	先手中食	後手中食	( 2 2 )	中食	( 2 1 )	( 2 0 )	中食	( 1 9 )	中食	( 1 8 )	(西暦)
同	中津城下新博多町	小祝浦	八屋村	松江村枝堺屋	湊村	松原村	元水村枝永井	大橋村	与原村	同	荻田村	朽網村枝新地	下曾根村	吉田村	恒見村	宿泊地
同	大分県中津市	大分県中津市	同 豊前市	同 豊前市	同 築上町	同 行橋市	同 行橋市	同 行橋市	同 荻田町	同	同 荻田町	同 北九州市小倉南区	同 北九州市小倉南区	同 北九州市小倉南区	同 北九州市門司区	現・市町村名
同	本陣松葉屋善太郎 豊後屋又左衛門	一向宗西派光専寺	領主より建置く本陣 仮亭主大島徳右衛門	酒造家中屋市左衛門	本陣村屋又左衛門 預主役所	庄屋武左衛門	百姓伴蔵	本陣油屋太四郎 肥後屋藤左衛門	大庄屋新津民助	同	本陣庄屋五郎右衛門 一向宗東派浄厳寺	庄屋六兵衛	本陣庄屋林蔵 百姓泰蔵	庄屋治六	一向宗西派善教寺	宿泊宅
雨逗留。江戸書状を認め、相渡す。当所 郡奉行より国産刻煙草を人別に目録を似 て被相贈。一同辞して帰す。恒星測定		恒星測定。中津浪人、江戸暦局書状持 参。中津候より丈長半切紙等被贈下	木星と午中太陽測定 領主より滋飴等被贈下		恒星測定			寰島半周測、恒星測定	寰島半周測	雨雪逗留	神ノ島一周を測る。 恒星測定	恒星測定		恒星十余星測る。		特記・天体観測
		一七九	一七九	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	一七八	大図番号



6		5	4	3		2	1	文化7年2月 (1810)	29	28		27	26		25		24	宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(10)	中食	(9)	(8)	(7)	中食	(6)	(3, 5)		(4)	中食	(3)	中食	(2)	(3, 1)	中食	(28)	中食	(27)						
浦下原村	古市村	同	小原村	富来浦	来浦村	小熊毛村	竹田津村		竹田津村	見目村	堅来村	浜村	同	高田村	長洲村	住江村広末	庄村	今津村						
同	同	同	同	同	同	同	大分県国東市		同	同	同	同	同	同	同	同	同	同						
福力屋儀兵衛	塩屋善助	同	大庄屋格後藤鉄之助	本陣 久保屋七郎右衛門 若屋喜三七	庄屋長右衛門	本陣和泉屋喜兵衛 和泉屋喜左衛門	大庄屋格小串千介		大庄屋格小串千介	庄屋幾治郎	百姓伝左衛門 伝左衛門隠居宅	一向宗西派浄心寺	同	本陣庄屋吉原運平 大畑助九郎	大庄屋長洲新三郎	百姓九郎兵衛	百姓実右衛門	大庄屋今津小四郎						
止宿、造酒家にて家作大に、二階共に畳百五十枚も敷よし、新宅なり。	雨天逗留	今在家村より手分測量のところ、船遅く測量なりかね、先手の分、後手にて測る。佐伯家より袴地等被贈下、回塩鮑屋に預け置く。	恒星測定			恒星測定。松平政之助家来使者にて帯地等贈らる。	同所逗留測。下川辺他五名乗船し姫島に渡海一周を測る。坂部他四名西中村字倉谷まで測る。恒星測定		杵築家士、杵築候より丹後島袴地等贈物持参。恒星、木星を測る。木星凌犯なし	延岡候より鯉節等被贈下、大庄屋を頼み売払う。恒星測定	桂川幅六十間を渡る	島原候より白半切被贈下。恒星測定	大雨逗留	駅館川幅七十八間	恒星測定	今津川幅百十間、庄川幅百間渡	恒星測定	中津候より茶被贈下、大庄屋を頼み売払う。恒星測定						
一七九	一七九		一七九	一七九	一七九	一七九	一七九		一七九	一七九	一七九	一七九		一七九	一七九	一七九	一七九	一七九						



16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(20)	(19)	(18)	中食 (17)	中食 (16)	(15)	中食 (14)	(13)	後手中食 先手中食 (12)	(11)	中食						
神崎町	同	鶴崎三軒町	吉島	鶴崎三軒町	三佐村	府内城下桜町	別府村	亀川村	同	日出城下上町	深江湊	真那井村	同	杵築城下中町 谷町	守江村	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
大分市	大分市	大分市	大分市	大分市	大分市	大分市	別府市	別府市	同	日出町	日出町	日出町	同	伊予屋春右衛門	本陣佐伯屋小助	
百姓嘉右衛門	同	本陣和泉屋八右衛門 平野屋治右衛門	庄屋野上喜八	平野屋治右衛門	本陣和泉屋八右衛門 平野屋治右衛門	橋本屋八左衛門	煙草屋市郎兵衛	庄屋与惣兵衛	同	南部屋録十郎	御茶屋預兼庄屋常作	庄屋仙助	同	本陣佐伯屋小助	伊予屋春右衛門	
恒星測定	雨天逗留	同所逗留測。白滝川端、徳島一周、乙津川端を測る。	小中島、家島一周を測る。	納。由布川を渡る、川幅百間。海原川幅八十一間。熊本候より搦刷木綿等被贈下、受納。	岡候より贈物、絞木綿等被下也。	止宿、酒造家七八百石醸すという。領主より真綿等被贈下、受納。惣年寄を頼み御贈物を売払う。恒星測定。暦局へ書状を出す。	載あり。恒星測定	北石垣村に鬼ヶ窟というものの二ヶ所あり。石郭にて大なり。日本紀第七巻に記載あり。恒星測定	かつ恒星測量も成らず。	日出候より保多木綿等被贈下、受納。恒星測定	同所逗留測。川崎村より日出城下を歴て辻間村枝頭成村まで測る。午中を測る。忠敬木星測量用意に残り居る。午後禅宗松屋寺に行き大そ鉄を一覧し、八幡宮へ越し大楠を見る。七ツ頃より曇る。木星	同所逗留測。杵築城下より原村尾本尻まで測る。森久留島候より杉原等被贈下、受納。恒星測定	木星測量、恒星測量共に不測	同	同	
一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一	一八一



宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
30	(3)	同	同	同	日食測量の為同所に逗留	
29	(2)	同	同	同	同所逗留測。落浦字摺木より字間脇まで測る。保土崎一周を測。風波に付見切五町ばかり。	一八三
28	(4.1)	鳩浦	同 津久見市	一向宗東派立法寺	津久見村字赤崎より鳩浦を歴て久保泊まで測る。恒星測定	一八三
27	(31)	同	同	同	同所逗留測。津久見村千怒崎より網代浦を歴て字赤崎まで測る。	一八三
26	(30)	同	同	同	大雨逗留。恒星測定	一八三
25	(29)	津久見浦	同 津久見市	修験与雲山寂光院	野島一周を測る。	一八三
	中食	堅浦本村	同 津久見市	当山派		一八三
24	(28)	松崎村	同	同	深江村字焼尾崎より松崎村まで測る。黒島一周を測る。恒星測定	一八三
23	(27)	松崎村	同 津久見市	庄屋門左衛門	佐伯街道を横切りに臼杵城下より松崎村まで測る。坂部測量先より松崎村へ来り俱に恒星木星を測る。木星は低卑蒙氣にて不測。	一八三
		大泊村	同 臼杵市	庄屋五兵衛	深江村字焼尾崎より逆測、海添村字アワビまで測る。津久見島一周を測る。	一八三
22	(26)	同	同	同	同所逗留測。平菌村字諏訪方崎より臼杵城下市中を経て海添村字アワビまで測る。恒星測定	一八三
21	(25)	同	同	同	雨天逗留	
20	(24)	臼杵城下唐人町	同 臼杵市	本陣秦吉左衛門	佐志生村より平菌村字諏訪方崎まで測る。臼杵候より御贈物半切紙等被下也、受納。日出城下より浅草曆局用状一封相届く。	一八三
19	(23)	佐志生村	同 臼杵市	本陣庄屋亀井平四郎		一八一
18	(22)	同	同	同	同所逗留測。関村上浦より地藏崎を歴て関村下浦まで測る。高島一周を測る。恒星測定	一八一
17	(21)	佐賀関村	同 大分市	本陣阿部民部太夫 小野要人	高島一周を測る。早吸日女太神宮へ参詣。恒星測定	一八一



文化7年3月(1810)														宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
13	12	11		10	9	8	7	6	5	4	3	2	1							
(16)	(15)	(14)	中食	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)							
同	地松浦	佐伯城下本町 船頭町	柏江村	同	同	同	佐伯城下本町 船頭町	同	古江浦	大入島 高松浦	津井浦	同	鳩浦							
同	同 佐伯市	同 佐伯市	同 佐伯市	同	同	同	同 佐伯市	同	同 佐伯市	同 佐伯市	同 郡上浦町	同	大分県津久見市							
同	本陣百姓嘉左衛門 百姓平蔵	宮崎儀右衛門 栗屋新左衛門	庄屋新五郎	同	同	同	宮崎儀右衛門 栗屋新左衛門	同	庄屋儀兵衛 百姓三左衛門	本陣禅宗济家大休庵 百姓十兵衛	一向宗西派真宗寺	同	一向宗東派立法寺							
同所逗留測。沖松浦字大崎より二俣字野崎まで測。鮎浦字戸切より日野浦字西ノ浦まで逆測。両手測初より雨に逢い、測を残して帰宿。	大江灘村字長波石より沖松浦字大崎まで測る。外に八島一周測。風波難測見切七町斗り。恒星測定	大江灘村字長波石まで測る。恒星測定	歴て	同所逗留測。久部村字池田より柏江村を測る。佐伯城下市中および中方島を測る。	同所逗留測。沖ノ方島、長島一周を測る。佐伯城下市中および中方島を測る。	同所逗留測。海崎村中河原より佐伯城下広小路まで測る。佐伯侯より御贈物半切紙被下也。外に料理代を給る。受納。	古江浦より海崎村中河原まで測る。	大雨逗留	残大入島測る。忠敬・坂部午前高松浦にて地図、午後古江浦へ越す。	津井浦より古江浦および彦島一周を測る、ならび大入島測る。恒星測定	恒星測定	同所逗留測。久保泊より落浦字摺木まで測る。落浦字間脇より蒲戸浦字ノウガ内まで測る。忠敬・坂部は相残り午中を測る。また江戸暦局行用状を認、この所より佐伯城下に出す。恒星測定	日食測量。初き前より黒雲連々と出る。初き不測、それより雲間に食分を測る。食後一面大曇天、夜も同じ。							
一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三							



宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号	
2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4		
( 2 8 )	( 2 7 )	( 2 6 )	( 2 5 )	( 2 4 )	( 2 3 )	( 2 2 )	小休	( 2 1 )	( 2 0 )	( 1 9 )	( 1 8 )	( 1 7 )	
同	同	同	畑野浦	同	同	色利浦	小浦内檜浦	同	同	同	丹賀浦	同	
同	同	同	同 佐伯市	同	同	同 佐伯市	同 佐伯市	同	同	同	同 佐伯市	同	
同	同	同	富田達右衛門 入津浦大庄屋	同	同	御手洗与七郎 米水津浦大庄屋		同	同	同	源右衛門 百姓甚十郎	同	
同所逗留測。字下り松鼻より竹野浦河内まで測る。居立浦より逆測、竹野浦河内まで測、これより横切山越え峠まで測る。恒星測定	風雨、逗留	大風雨、終日に至る。逗留	西野浦字元竜王鼻より居立浦まで測。畑野浦字小浦より畑野浦を過ぎて字下り松鼻まで測。	同所逗留測。鶴岬より字元ノ鼻まで測る。浦白浦字鯨ヶ浦より字間越を歴て山越横切、中越浦字猿戸まで測。字間越より浦白浦字元ノ鼻にて合測。横島測る。恒星測定	同所逗留測。字黒鼻より宮野浦字岸ノ鼻まで測る。小浦字珍崎より鯨ヶ浦まで測。恒星測定	小浦より円字黒鼻まで測。恒星測定	中越浦字地下ノ鼻より山越し横切を、米水津浦内小浦まで測。小浦より字珍崎まで測。	大島、小間島、高手島一周を測る。梶寄浦より鶴岬まで測る。	大風にて大浪、測量成らず逗留。	大島へ渡海。大雨になり測量相成らず帰宿。	羽出浦字西浦より丹賀浦を歴て居浦まで測る。	同所逗留測。二俣字野崎より日野浦字西ノ浦まで測。鮪浦字戸切より羽出浦字西浦まで測。	
一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三			一八三	一八三	







宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
5	(7)	島野浦村	同 延岡市	本陣庄屋角次 百姓十五郎	古江村海辺より字越ノ浜を歴て熊野江村字彈正平まで測る。字越ノ浜より山越横切、熊野江村海辺まで測る。字彈正平より熊野江村を歴て須怒江村下ノ浜まで測る。恒星測定	一八三
6	(8)	延岡城下南町	同 延岡市	客屋町年寄 渡辺新次郎	須怒江村字下ノ浜より浦尻村字川口を歴て字安井浜まで測る。川口より浦尻村入口まで片測。川船にて着。延岡候より鰹節を被贈下。即ち受納。	一八四
7	(9)	同	同	同	同所逗留測。浦尻村字安井浜より川島村字荒平を歴て海辺五ヶ瀬川を渡り出北村方財村界まで測る。五ヶ瀬川渡口より字新茶屋まで打上げ測。出北村方財村界より岡住村字浜子まで打上げ測。江戸暦局へ書状を出す。	一八四
8	(10)	同	同	同	同所逗留測。河原町橋際より逢瀬川橋を渡り大手北町、坂田橋、岡富村字ツノ原門を歴て大武町字清高島、川島村字川口まで測る。元方財島、助兵衛島、大武島、三島を測。恒星測定	一八四
9	(11)	鯛名村	同 延岡市	本陣百姓源右衛門 国次郎	出北村方財村界より土々呂村字打出浜を歴て鯛名村過ぎ赤水村天神前まで測る。恒星測定	一八四
10	(12)	鯛名村 尾末浦	同 延岡市 門川町	本陣讃岐屋庄藏 木屋要藏	青木他三名、風止次第海岸測量に残す。 土々呂村字打出浜より街道横切加草村海辺、海岸門川村字尾末浦測所を歴て門川村、日知屋村境まで測る。乙島一周を測る。高鍋候より国産贈り物椎茸被下也、即ち受納。江戸暦局用状届く。	一八四
11	(13)	同	同	同	同所逗留測。赤水村天神前より庵川村小屋谷を歴て加草村海辺まで測る。庵川村唐船波石岬を片測。	一八四
12	(14)	日知屋村細島町	同 日向市	本陣摂津屋善兵衛 豊前屋彦右衛門	門川村、日知屋村境より後畑浦、字観音崎を歴て前畑浦入江海辺まで測る。後畑浦より横切前畑浦入江海辺、字古田を歴て字脇ノ浜まで横切測。	一八四
13	(15)	上別府村美々津	同 日向市	領主客屋 飯亭主伊藤清兵衛	字古田より岬を回り字脇ノ浜を歴て財光寺村を過ぎ平岩村、才脇村界まで測る。	一八四



21	20	19	18	17	16	15	14	宿泊日・旧暦
(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(西暦)
江田村	同	同	佐土原城下 蚊口小路	高鍋城下	瓜生村都濃町	同	同	宿泊地
同 宮崎市	同	同	同 宮崎市	同 高鍋市	同 都濃町	同	同	現・市町村名
本陣庄屋用左衛門 百姓久兵衛	同	同	本陣油屋友吉 藤屋平五郎	客家 飯亭主岩村重五郎	領主客屋 飯亭主緒県文五郎	同	同	宿泊宅
測定 下田島村袋広瀬境より住吉浜、江田村を 過ぎ、大島村を歴て北方村神武天皇社前 まで測。後手は直に神武社へ参詣。恒星	同所逗留測。狐島一周を測る。鼠島半周 を測。	同所逗留測。富田村境字木付女より富田 村渡場を歴て一瀬川を越え下田島枝大炊 田川口まで測る。	同所逗留測。富田村境字木付女を歴 て下田島村字大炊田海辺まで測。それよ り佐土原城下へ打上げ測。城主島津淡路 守殿より御挨拶御贈物、酒、肴被下也。 御分家島津式部殿より御挨拶御国産の御 贈物、ろうそく、御両家共即ち受納。お 肥家士、御勘定所よりお肥御渡しし、暦局 用状を持参。恒星測定	字荒ヶ下海辺より富田村境字木付女を歴 て下田島村字大炊田海辺まで測。それよ り佐土原城下へ打上げ測。それより高鍋城下へ 打上げ測。秋月佐渡守殿より国産御贈 物、椎茸被下也、即ち受納。暦局へ書状 を出す。恒星測定	名貫川前より平田村字和伊金剛尻を歴て 字荒ヶ下海辺を測。それより高鍋城下へ 打上げ測。秋月佐渡守殿より国産御贈 物、椎茸被下也、即ち受納。暦局へ書状 を出す。恒星測定	美々津川端より岩山村字オロノ下を歴 て、瓜生村字福原尾までおよび海辺名貫 川端を測。字福原尾より都濃町へ打上げ 測。	昨日の風雨にて行先の小川水増渡川成り がたきにつき逗留。一手測。忠敬は地図 をなす。平岩村、才脇村界より才脇村を 歴て美々川前までおよび川幅を測る。川 前より中島渡口まで片測。中島片測。	風雨逗留。佐土原島津候より贈物あり、 鯉節被下也、即ち受納。
一八五	一八五	一八五	一八五	一八五	一八五	一八四	一八四	特記・天体観測
一八五	一八五	一八五	一八五	一八五	一八五	一八四	一八四	大図番号



## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

＊刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

### ②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的にJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

＊印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はL判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル（JPEGフォーマット）にしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまいません。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

### 送り先

・電子メール添付の場合 inohken@icloud.com

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。  
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。  
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号（第78号）は2016年2月発行 原稿×切は12月31日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！

## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

### 四、事務局所在地

〒153-0042

東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール inohken@icloud.com

郵便振替口座 00150607286100

伊能忠敬研究会関係ホームページ

①「InoPedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

②「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

③「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

編集後記 ◇本誌のような出版物の編集をしていくのも気になるのは、図などの引用に関わる事柄です。出典明記だけで特段の申請を必要としないものから、何ヶ月もかかる手続

きをした上で掲載料を支払ってようやく許可が下りる場合まで、いろいろあります。◇図をコピーしたプリントを配布することが多い大学でも、最近では著作権に関する講習の受講を教員に義務づけているところが多くなっています。◇勿論、伊能図そのものは著作権の対象外ですが、有体物に関する所有権や出版権など、周辺の諸権利が関係してくる場合があります。◇事情は複雑です。◇日本人は法律を勝手に解釈するのが得意だ、とある外国人ジャーナリストが評していましたが、出版物や著作権に関わるコンプライアンスについては、その道に精通した人に相談しながら慎重に対応する必要があります。（K・T）